

満洲の廟会

——「満洲国」期を中心に——

ふか お よう こ
 深 尾 葉 子
 やす とみ あゆむ
 安 富 歩

- はじめに
- I 県城経済
- II 廟会の期日と市場機能
- III 農村の廟と廟会
- IV 大石橋迷鎖山の娘娘廟会
- V 考察

はじめに

安富（2002a）は1930年前後の満洲の流通機構を調査し、各県の流通が県城に集中する、「県城経済」と呼ばれる機構の優勢であることを確認した。これは定期市の重層構造が一般に見られた中国本土と大きく異なっている。この差異をもたらす理由として安富は、

- ・蒙古地方の馬と長白山系の木材の豊富な供給ゆえに荷馬車が広く用いられたこと、
- ・厳しい冬の寒気による凍結のため、輸送・保存コストの低いこと、
- ・主要生産物が商品性の高い大豆であり、物資の流通に強い季節性のあること、

を指摘した。

安富・福井（2003）は、満洲事変下の満洲各県において、県城の有力者が中心となって発行した「県流通券」と呼ばれる紙幣と、これを可

能とした県の権力構造を論じた。県によっては流通券が2～3年間にわたって安定した流通を見せているが、これはある種の自治的組織が県を単位として形成されていたことを意味する。このような紙幣が県全体で順調に流通したという事実は、県城の有力商人を中心とする権力が県全体を覆うものであったことを示す。このような現象もまた同時期の華北にはほとんど見られず、河北省や山東省では各種商人の発行する私帖の流通が1940年代に至るまで継続していた。

安富（2002b）は華北に見られるような機構を「網状組織」、満洲のそれを「樹状組織」と呼び、その運動特性の違いが両地域の歴史を決定する上で大きな役割を果たしたという仮説を提唱した。本稿の目的は、社会的文化的側面においてどのような機構が満洲に形成されていたかを、「廟会」に注目することで考察することにある。

中国北部において廟会が、かつて重要な社会的機能を持っていたことは広く知られている。19世紀後半に宣教師として山東に20年以上滞在したアーサー・スミスは、中国の村落における最も目立つ建物は廟であり、中国人の団結能力は廟を設立・運営する「会」に最も顕著に表わ

れると論じている [Smith 1899, 30, 141]。戦前の西北中国で広範囲に調査を行った今堀誠二はスミスの指摘を受けて「寺廟だけが中国の全体についていえる最大公約数であり、全般的観察に適切な資料を公平に供給してくれる」[今堀 1953, 5-6] と主張している。また平野義太郎も寺廟を村落の求心力の根幹と見做し、村落共同体論の基礎とした [平野 1943, 41]。平野の共同体論に対して批判的検討を加えた旗田巍もまた廟会のありかたに注目した [旗田 1986]。

天野 (1940), 山根 (1995, 77-101), 斯波 (1961), 姜 (1996, 123-126), 李 (1998, 31-34, 67-74, 123-129), 許 (1998, 296-302), Yang (1944) などの一連の研究の明らかにした如く、廟会が担っていた経済的機能も無視しえない。華北では定期市と廟会の市が役割を分担する形で農村における流通機構が組織されており、廟会の宗教的側面は二次的なものとなっていた。

最近では、石田浩が地縁結合の紐帯としての廟の存在に早くから着目し、華北の農村における廟の重要性とその復活の傾向を指摘している [石田 1986, 141-144]。ドアラは戦前の華北農村の廟会の機能を論じ、廟会をめぐる文化的相互関係の持つ政治的な意味を明らかにした [Dura 1988, 118-157; 1995, 162-163]。

中華人民共和国成立後に廟会は政策的な抑圧を受け、特に1960年代以降は公式に開催することが不可能となった。その後、1980年代になって、宗教活動ならびに民間文化活動への制約が緩和されるに及んで中国各地で復活している。筆者の1人がすでに明らかにしたように、陝西省北部ではコミュニケーションの重要な結節点となり、地域における政治的役割すら果たしている [深尾 1998]。このほかにも、福建や広東

での廟の復興については、すでにフィールドワークに基づく研究が数多く出されており [三尾 1997; Dean 1993; 廖 1995, 707-722, 鄭 1995, 579-598; 劉 1995, 707-724], 華北や西北でも村廟や地域廟の復活のプロセスが考察の対象となっている [三谷 2000, 317-345; Jing 1996]。また、中国全土の主要な廟を解説した『中華廟会事典』によれば、江蘇省では村の土地廟を除く県以上のレベルの廟だけで100カ所以上、北京市で3000カ所近く、廟があるとされ、全国では数十万の数になると推計されている [陝西人民出版社 1994]。

ところが、満洲については内田 (1970) による同時代の調査を除くと、これまで正面から廟会の問題が論じられたことがない。この空白を埋めるべく、本稿では満洲の廟会について2つの観点から論じる。

第1は、この地域で廟会が盛んであった1920～30年代において、全体としてどのような時間的・空間的分布を持っていたかの確認である。このために当時の地方志および日本語資料に基づいて満洲全体の廟会の開催期日やその様相を調査する。なお、本稿の期日の表示はすべて農曆 (陰曆) である。

第2に遼寧省大石橋市迷鎮山の娘娘廟会に注目し、この廟会の様相を明らかにする。迷鎮山の廟会を対象とする理由は、(1) 1920～30年代には「全満最大」と言われる大規模な廟会であったこと、(2) 複数の文献資料が得られること、(3) 南満洲鉄道株式会社による記録映画が残っていること、である。特に (3) は重要であり、中国全土を見渡しても、戦前の廟会の様子が本格的な記録映画の形で残されているケースはここ以外にはないと考える。また、我々は2002年

5月に迷鎮山を訪れ、現在の廟会の実態を調査したので、過去の様相との比較にも言及する。

本稿は以下のように構成されている。第Ⅰ節では安富(2002a,b)、安富・福井(2003)に基づいて、満洲の社会機構についての我々の仮説を説明する。第Ⅱ節では1920～30年代の満洲全体の廟会の時間的空間的分布を、その期日と市場のあり方に注目しつつ論じる。第Ⅲ節では主として「満洲国」時代の日本側の調査に依拠して、農村における廟会の様相を論じる。第Ⅳ節では「満洲国」時代の大石橋の娘娘廟の姿を素描し、さらに1947年の廟の破壊から92年の再建に至る過程と2002年の廟会の様相を示す。第Ⅴ節では以上の議論を基に特に華北との比較を中心に考察を加える^(注1)。

I 県城経済

安富(2002a)が論じたように、近代満洲の市場構造は華北と大きく異なっている。その違いは何よりも定期市が稀にしか見られない点にある。定期市網のかわりに満洲で機能していたものは、県城あるいは鉄道の駅が県全体の流通の独占的結節点となり、各地の農民がその中心地と直接に取引するという形態の機構である。安富は、石田(1964, 242-257)にしたがってこれを「県城経済」と呼称した。県城に雑貨商・糧棧・大地主などが聯号等の形態で相互に連携しつつ存在し、通常は零細な店舗商人と行商人を経由して農民と接触し、場合によっては秋の収穫を担保とした金融を供与する。収穫期には農民が県城に現われ、県城の穀物問屋に生産物を直接販売し、その関連の雑貨商から生活必需品を購入する。県城は奉天・哈爾濱といった大

都市と移出入の交易・金融関係を持ち、これらの大都市は營口・大連などの港湾都市と関係を持つ。この港湾都市を通じて中国本土、特に上海と満洲の関係が結ばれる。石田は、このような中国本土—港湾都市—大都市—県城—農村と連なる樹状の組織の存在を主張したが、これはスキナーが描いたような重層的な網状の定期市機構と対照的である [Skinner 1964-65]。

県城経済の形成された要因は、蒙古から供給される馬、長白山から供給される広葉樹材、冬季の大地の凍結、大豆流通の季節性にある。馬と木材が豊富に供給されることから「大車」と呼ばれる馬車が普及し、特に冬には大地が凍結するために馬車輸送の効率は高くなった。さらに満洲では商品化率の高い大豆が農地全体の3割を占める体制が成立し、物資流通に強い季節性が見られた。こうして農民が冬に馬車に乗って農産物を県城や鉄道駅に運び、その地の商人と直接取引する流通機構が出現した [安富 2002a]。

県城経済機構と定期市網の違いはたとえば人口の分布に影響を与える。満洲国の版図から、「蒙地」(興安四省と熱河省)を除外した地域の人口は1940年の国勢調査によれば3655万人であった。これは山東省とほぼ同水準であるが、面積は4倍近い。すなわち、山東省の人口密度は1平方キロあたり200人を越える水準に達したのに対し、満洲の上記地域の人口密度は47人に過ぎない。ところが、山東省には人口5万人以上の都市が11カ所しかないのに対し、蒙地を除く満洲国には29カ所もある。人口密度が4分の1に過ぎない満洲に、山東の3倍近い数の都市が存在したのである [安富 2002a]。

この違いは民間の紙幣(私帖)発行の状況に

も現われている [安富・福井 2003]。1910年代半ばまでの満洲は、華北などと同様に多種多様な民間紙幣が流通していた。ところが、華北における公権力の民間紙幣抑制がうまく機能しなかったのと対照的に、満洲では張作霖政権初期の1917年10月2日における禁止令が相当の実効性を持っていたとされており、1929年段階の調査では、通常の私帖の流通が報告されている県は満洲全体で10県に満たない。

1931年の満洲事変勃発は金融面でも甚大な衝撃を与え、満洲各県は厳しい金融梗塞に直面した。満洲の商人達はこの混乱に個々別々の私帖発行で対処するのではなく、県城の有力者が「金融委員会」等を結成し、県公署と協力しつつ「県流通券」などと称する紙幣を発行した。安富・福井 (2003) の調査では、50~60県において県流通券の発行が確認されている。

県城有力者の団体がこのような独自の活動を展開しえたという事実は、県城を中心として県を範囲とした政治的まとまりの存在を示唆している。満洲においては公権力が脅迫にせよ懐柔にせよ何らかの方法で動員しうる政治的実体が県という比較的大きな単位 (人口20万前後) で存在した。すなわち、県城経済機構に対応する形で、政治的な機構も独自の形態を持っていたと考えられる。

以下では、このような県城経済機構が満洲の社会的・文化的側面にどのような影響を与えていたのかを考察する。ここで我々が注目するのは「廟」および「廟会」のあり方である。なぜなら廟は中国農村社会の地域ごとのありようを鋭く反映する機構であると考えられるからである。

各節の調査により、満洲の廟会には以下の特徴のあることが明らかとなる。

- ・満洲の各県はどこも同じ組合せの廟を持っている。
- ・同じ神を祀る廟はどの県でも同じ日に廟会を開く。
- ・娘娘廟が特に重要である。
- ・大石橋迷鎮山娘娘廟会のような大型の廟会があり、多数の上層農民が鉄道・馬車で集まる。
- ・村や屯といったレベルの廟・廟会は一般に不振である。
- ・農村には自家用の小廟が多数ある。
- ・廟会の市場機能は限られている。

これらの特徴は先に述べた県城経済体制と深くかかわるものであり、定期市と廟会が流通を構成する華北と全く異なっている。

II 廟会の期日と市場機能

中国における廟会は純粹の宗教儀礼の場ではない。山根 (1995, 84-85) の指摘するように、廟会は宗教的祭礼を契機として成立したものはあるが、そこに市場が開催され、民衆の重要な娯楽の場となり、また人々の紐帯を形成し確認する結節点としても機能した [Yang 1944]。芝居と廟会は切り離せないほど密接な関係にあり、神に奉納される形で上演される芝居を見ることが、平素娯楽に恵まれない農民にとっては無上の楽しみとなる [山根 1995, 94]。

廟に参拝するために集まる人々を目当てとして市が開かれるが、その市場を目指して人々は廟会に集まってくる。1930年代の山東省の農村市場機構について調査したヤンは、1年に1度開かれて数十万人が詰めかけるある廟会に注目した。それは五皇上帝の生聖祭であると同時に、

年に1度の大手でもある。廟会の大市と通常の定期市との違いは、規模と商品の種類・量であり、定期市が村と村の商品交換を担うのに対して、廟会は地域間の流通を実現すると指摘した〔Yang 1944, 26-27〕。かくして廟会の宗教的色彩は往々にして低下し、場合によっては祭礼とは全く関係のない廟会も開かれるようになった〔姜 1996, 123-126; 李 1998, 31-34, 67-74, 123-129; 許 1998, 296-302; 山根 1995, 86〕。

上述の如く Smith, 今堀, 平野は廟と廟会を農村社会のひとつの中軸と見做したが、それはこのような複合的社会機能に注目してであった。しかもそれはドアラの示したように、政治的な力を動員しあるいは注入する経路の役割も果たしたのである。

また廟は単独にそれ自体として存在するのではない。深尾 (1998) が明らかにしたように、同じ地域内にある廟は相互に参拝者を奪い合う形で競合し、またその「効験」を分けあうことで相補的な関係をも持つ。様々な神を祀り、様々な規模を持つ個々の廟は、相互に繋がっていて、無限に広がるネットワークを成している。個々の廟を結節点とする人々の紐帯は、廟と廟を繋ぐネットワークによってさらに高次に接続されている。

この観点からすれば、廟会の期日の設定は重要な意味を持っている。廟会の日程が相互に重なりあわないように配分しておけば、お互いの動員力を大きくすることができる。逆に同じ神を祭る廟が同じ日に廟会を開くなら、人々がアイデンティティを共有する契機となる。期日設定のあり方の違いは、廟会の運営機構の形態上の差異を反映している可能性がある。

そこで本節ではまず期日の設定の仕方に注目

する。また、廟を支える重要な要素である市場のあり方を調査する。

1. 廟会の期日

丁・趙 (1989) は東北の県志の「民俗」に関する記述を収録した資料集である。これを通読すると東北ではこの資料集で「歳時民俗」と分類されている部分に廟会についての記述が集中していることがわかる。しかも興味深いことに、満洲の県志には「天齐 (東岳) 廟会」、「佛誕日」、「娘娘 (碧霞元君) 廟会」、「葉王廟会」、「関帝廟会」以外の廟会についての記述がほとんど見られない。ごくわずかの県で火神廟会 (1月15日)、観音誕辰 (2月19日)、王母蟠桃会 (3月3日)、虫王廟会、青苗会 (6月6日)、南関帝廟会 (6月24日)、城隍廟会 (5月10日、28日) などが開かれている、あるいはかつて開かれていた、という記載があるのみである。そこで廟会についての記述のある県志を選び、上記の5種類の主要廟会の日程を採取し、さらに廟会についての具体的な記述がある場合にはそれを備考に記入したものが表1である。

この表で最も注目すべきは、廟会の期日の設定がどの県でもよく似ている点である。廟会の日程は全満を通じてほぼ一定しており、たとえば娘娘廟会についての記述のある34県のうち33県が4月18日に開催している。これ以外の会期を持つ県は黒龍江省に限られ、4月8日に開催する綏化県と、4月8日、18日、28日と分散開催している呼蘭県と安達県だけである。

井岡 (1939, 159) は「各地一定はせぬが、十八日を中心に五日間位行はれるのが普通である、唯だ、新京に近い『大屯』の娘娘廟は旧四月二十八日を中心に行はれている」とする。また奥村 (1940, 2) も「大体に於て、毎年旧暦四月

十八日を中の日として三日乃至五日連続して行はれる。尤も地方（新京、大屯等）によつては旧暦四月八日、十八日、廿八日と『八』の日をえらんで開催するところもあるが、大体十八日頃に多く開催される」としている。

わずかな例外の存在は、廟会の会期が厳密に統制されているわけではなく、日程をずらすことが可能であることを示す。にもかかわらず各県はほぼ同じ会期を採用しているのである。日程がどの県でも同じなのは娘娘廟会だけではない。天斉廟会（3月28日）、佛誕日（4月3日）、葉王廟会（4月28日）、関帝廟会（5月13日）も同様であり、丁・趙（1989）ではこの規則に反する会期を示す例は見られない。

次にこの表から満洲では娘娘廟会が最も重要であったことがわかる。廟会についての言及のある39県のうち、実に34県で娘娘廟会についての記載がある。これに対して葉王廟会は28県、関帝廟会は20県、天斉廟会は14県、佛誕日は8県である。

奥村（1940, 1）はこの娘娘廟会の重要性を次のように書いている。

満洲国各地で行はれる娘娘祭の参詣者は無慮二百五、六十万人を下らない。私が今日迄調べあげた娘娘廟会の数だけでも百四箇所に上つてゐるが、恐らく満洲国全体では二百七、八十個所位はあらう。その祭の盛んな事は、満洲国が現在持つ他の色々な催しもの、中でも断然群を抜いてゐる一大行事である。而も当日は村から部落へ、部落から農村へ、農村から大都邑へ、満洲国到る處で夫々地方的に大規模に行はれる。

表2は奥村（1940, 188-192）より作成した廟会の期日の一覧である。この表でも、関東州を除く満洲各地では上述の廟会の会期規則がほぼ完全に守られている。例外は佳木斯の娘娘廟が4月8日に開かれていることだけである。大石橋財神廟街の娘娘廟が3月23日および9月9日という会期を持つが、この日付から見てこの娘娘廟は次に述べる天后廟系であろう。

この表で検討を要するのは関東州の廟会である。この地域では廟会は4月18日の日付を持つものが5カ所（娘娘3、天斉1、金頂山1）、3月23日の日付を持つものが15カ所（天后3、娘娘12）、それ以外の日程のものが6カ所（天后1、娘娘5）存在する。4月18日の娘娘廟は、その会期設定から見て上述の満洲の一般の娘娘廟会と同じ系列に属すると見做しうる。

3月23日のものは一般の娘娘廟ではなく、「天后宮」あるいは「海神娘娘廟」と呼ばれる種類の娘娘廟と考えられる。上田（2002）が示したように、満洲においては、これらは山東系の会館内に設置されている場合が多く、山東商人との関係が強い。会期は天後の誕生日とされる3月23日に開かれるのが普通である。

第3のグループは普蘭店の天后宮（1月15日、7月15日）と娘娘廟会3カ所（7月15日、2月8日、4月4日）および、貔子窩の娘娘廟会2カ所（毎月1・15日、6月13日）である。このような会期のばらつきは満洲では珍しい。この地域に限り、後に見るような華北的な廟会が開かれていることになる。

農村の廟会については節を改めて論じるが、県志のなかでも、县城以外の廟会についての記述とおぼしきものがわずかながら見られる。表1の「備考」の欄は、娘娘廟会が各県に複数

表1 満洲における廟会の期日

遼寧省	天齊廟会 (東岳)	佛生日	娘々廟会 (碧霞元君)	藥王廟会	関帝廟会 (雨節, 單刀会)	備考
奉天通志 34	3月28日		4月18日	4月28日	5月13日	4/18 「黒城関帝廟, 鎮郷娘娘廟香火会期」 4/18 「眼光経母誕辰」 「凡城郷有廟宇処無不有会」 廟会の悪口。「迷信」 「敗壞風俗」 (65頁)
瀋陽県志 17	3月28日		4月18日	4月28日	5月13日	4/18 「四月十八日為娘々廟(即碧霞元君廟)会期, 香火極盛, 婦人無子者多于此日往禱之, 農工商一律放假, 而龍州山会尤盛于他處。」28日「農工商人亦有放工者, 虎莊屯西山藥王廟会尤為特盛。」
新民県志 26			4月18日	4月28日	5月13日	元旦 「村鎮有土地廟者, 皆往廟内送香」 4/18 「黒城関帝廟, 郷村娘娘廟香火会期」
遼中県志 30	3月28日	4月 8 日	4月18日	4月28日	5月13日	4/18 「紅男緑女多赴就近之娘娘廟焚香祝禱, 一般商販亦皆前往舊得果品, 香紙等物, 俗曰赴廟会。」
遼陽県志 28			4月18日	4月28日	5月13日	「3月28日与4月18日, 婦女多至廟燒香祈福」
海城県志 37	3月28日	4月 8 日	4月18日	4月28日	5月13日	3/28 「是日每多風雨, 本境無此廟, 好事物者皆省內天齊廟」; 4/18 「是廟名広嗣庵」 「四月 初八, 十八, 二十八日, 城郷婦女詣廟焚香, 官禁屠宰。」
台安県志 30			4月18日	4月28日	5月13日	
桓仁県志 30			4月18日	4月28日	5月13日	
桓仁県志 37			4月18日	4月28日	5月13日	
昌図府志 10	3月28日	4月 8 日	4月18日	4月28日	5月13日	
鉄嶺県志 33	3月28日	4月 8 日	4月18日	4月28日	5月13日	
開原県志 1856	3月28日	4月 8 日	4月18日	4月28日	5月13日	
西豊県志 38	3月28日	4月 8 日	4月18日	4月28日	5月13日	
管口県志 33			4月18日	4月28日	5月13日	4/18 「(宗教篇海雲寺) 海雲寺俗名岳州廟, 岳州廟岳州即龍州之監官也, 寺在米真山東南坡上距大石橋西南五里... 每年旧曆四月十八日值廟会之期, 士女如雲, 香火繁盛, 臨時集市百三四十里而遠亦大觀也」 「(民俗篇歲時) 四月十八日為龍州碧霞元君廟会, 婦人無子者多于此日往禱之, 百物雜陳, 遊人如織, 巨四五里, 由十七日起至二十日始閉会。」 (17~20日); 28日 「医士群集合于西天廟院内討論会務」
蓋平県志 30			4月18日	4月28日	5月13日	4/18 「四月十八日邑北六十里龍州廟会, 即盛京志所載龍州也, 山上旧有娘娘廟, 香火極盛; 山下禪院名海雲寺, 每廟会期演劇五日, 先時販完物類者云集于茲, 凡人民日用必需之物, 無不備具, 行行分列, 供人採購, 四方來遊觀物體擊肩摩踵以雜日, 有周鉄溝, 橋台堡, 鄉寨莊, 鉄嶺屯, 百家寨諸村会辦演戲歌, 指歌雜劇, 群集山廟祝神, 以祈豐年, 今其地点已撥歸管口县矣, 志之以略存昔日属界会场情形耳。」
安東県志 31			4月18日	4月28日	5月13日	4/18 「男女至元宝山碧霞皆焚香... 而郷間各寺廟, 婦女還願者亦多。」
鳳城県志 21			4月18日	4月28日	5月13日	4/18 「黒城龍風寺此会尤盛」; 5/13 「四郷関帝廟懸灯挂彩, 開門一日, 也会備猪, 酒往祭(城内婦商会主辦), 歡飲而還。」
阜新県志 34			4月18日	4月28日	6月 6 日	3/28 「東関東岳廟举行香会」; 4/18 「城内外娘娘廟会百貨雜陳食品玩具...」 (17~19日); 4/28 「東関地蔵寺, 北關葉王廟会, 郷村來遊者接踵于途, 其繁盛与娘娘会相埒。」 (27~29日); この県志は廟会記述が多い。2/2 龍台頭日, 2/19 觀音誕辰, 5/28 城隍廟会 (27~29日) 其繁盛与娘娘廟葉王廟相似,
錦泉志 20	3月28日		4月18日	4月28日	6月 6 日	

義県志 31			4月18日	4月28日	5月13日	1/13-14 「城内大仏寺廟会、花炮雜陳、食品・玩具羅列成市、工商皆放假、游人塞途、男女往来、極一時香火之盛」；4/18 三箇所で廟会（17～19日）、23日城東細河左右斉家子、溝口子、車房、羊房、十三屯等聯会、前後五日、賑やかだったが最近は寂寞、28日二箇所、「其繁盛与娘娘廟会相呼」（27～29日）、この県志も記述多し、 5/10 城隍廟会
北鎮県志 33	3月28日	4月8日	4月18日	4月28日	5月13日	3/28 東岳経誕；4/18 「郷間以海濱鉄廠屯娘娘廟会为盛。」
錦西県志 29	3月28日	4月8日	4月18日	4月28日	5月13日	「四月 三八等日凡賽会必演劇敬神、近則多有不演者、遠近男女争赴之于廟中諸神前跪拜、謂之香火会。」
興城県志 27			4月18日	4月28日		
綏中県志 29	3月28日		4月18日	4月28日		
朝陽県志 30			4月18日	4月28日		
吉林省	天齊廟会 (東岳)	佛誕日	娘々廟会 (碧霞元君)	藥王廟会	閻帝廟会 (雨節、單刀会)	備考
吉林通志 1891	3月28日		4月18日	4月28日	5月13日	3/3 真武廟会、仙人堂会、三皇廟会、「城郷耆者均往祭神、不到者罰」；3/16山神廟会；6/6 虫王廟会；6/19 観音堂会；6/24 北山閻帝廟会；9/9三皇廟、仙人堂；9/17財神誕辰、
吉林新志 34			4月18日	4月28日	5月13日	4/28省城北大山大山是日会况甚盛、
長春県志 41	3月28日		4月18日	4月28日	5月13日	4/18 「泉城北門外有娘娘廟、是日起会焚香男女老幼可達二千余人、鎮郷各処有是廟者、亦于此日為会期。」；双十節「但此举惟城鎮行之、郷居農民多不注意。」
盤石県郷土志 37			4月18日	4月28日	5月13日	
安図県志 29			4月18日	4月28日	5月13日	4/18 「昔嘗每会演劇、今不例行矣。」
臨江県志 35	3月28日		4月18日	4月28日	5月13日	4/8 「泉城北郭水月宮及郷鎮各廟、多于是日為香火会期、然不及十八日盛也。」； 4/28 「城北閻帝廟香火会期、遠不及十八日盛。」
輯安県志 31		4月8日	4月18日	4月28日	5月13日	
懷徳県志 29		4月8日	4月18日	4月28日	5月13日	
梨樹県志 34		4月8日	4月18日	4月28日	5月13日	
東豊県志 31		4月8日	4月18日	4月28日	5月13日	
黒龍江省	天齊廟会 (東岳)	佛誕日	娘々廟会 (碧霞元君)	藥王廟会	閻帝廟会 (雨節、單刀会)	備考
呼蘭県志 20			4/8,18,28	4月28日	5月13日	「四月初八、十八、二十八等日、娘娘廟廟会」
双城県志 26			4月18日	4月28日		「以城内西大街閻帝廟（内有娘娘殿）為最熱鬧。」
珠河県志 29			4月8日	4月28日		「四月十八日廟会」
綏化県志 20			4月18日	4月28日		「四月十八日為娘娘香火会」
望奎県志 19			4/8,18,28	4月28日		「四月初八、十八、二十八等日、為娘娘廟之会期」
安達県志 36			4/8,18,28	4月28日		

(出所) 丁・趙 (1989).

表2 満洲における廟会の期日

	場 所	廟会月日	
関東州	天后廟	大連惠比寿町	3/23
	娘々廟	大連沙河口	4/18 6/24
	娘々廟	大連小平島	1/15 3/23 7/7
	娘々廟	旅順王家店	4/18 4/18
	娘々廟	旅順水師營	4/18
	娘々廟	旅順山頭	3/23
	娘々廟	旅順山頭	3/23
	娘々廟	旅順方家屯	3/23 6/17
	娘々廟	旅順方家屯	3/23
	娘々廟	旅順方家屯	3/23
	天齊廟	錦州閻家楼	4/18
	娘々廟	金州大孤山	3/23
	金頂山廟	亮甲店	4/18
	天后宮	普蘭店五島	1/15 7/15
	娘々廟	普蘭店五島	7/15
	娘々廟	普蘭店長嶺子	2/8
	娘々廟	普蘭店四道河子	4/4
	天后宮	貔子窩海洋島	1/1・9・15 3/23 5/13
	娘々廟	貔子窩猴嶺子島	毎月1・15
	娘々廟	貔子窩格仙島	3/23
	娘々廟	貔子窩瓜皮島	3/23
	娘々廟	貔子窩洪子東	3/23
	娘々廟	貔子窩北山上	3/23
娘々廟	貔子窩襄裏島屯	6/13	
娘々廟	貔子窩大嶺子屯	3/23	
天后宮	貔子窩哈仙島	3/23	
安東省	天后宮	元寶山	3/23
	娘々廟	元寶山	4/18
	娘々廟	劉家河	4/18-28
	娘々廟	鳳凰城	4/18
奉天省	天后宮	奉天大北関	3/23
	天齊廟	奉天小東関辺門	3/25-29
	娘々廟	奉天大南関	4/15-18
	藥王廟	奉天大南関	4/15-5/1
	天后宮	營口	4/28
	西大廟	營口	4/28-29
	娘々廟	大石橋	4/16-20
	天后宮	大石橋小梁口	3/23
	天后宮	大石橋夾心子	3/23
	娘々廟	大石橋財神廟街	3/23 9/9
	娘々廟	劉家河	4/18-28
	娘々廟	鳳凰城	4/18
	岳陽寺	熊岳城	6/27
	娘々廟	湯崗子	4/16-18
	興盛廟	鞍山	4/6-10
	娘々廟	遼陽	4/18
	娘々廟	撫順	4/18-20
	娘々廟	鉄嶺	4/17-19
娘々廟	四平街	4/18	
娘々廟	本溪湖	4/18	
娘々廟	梨樹	4/18	
娘々廟	鄭家屯	4/18	
吉林省	娘々廟	北山	4/18
	娘々廟	大屯	4/18-20
	娘々廟	榆樹	4/18
	三母廟	扶餘	3/3
濱江省	娘々廟	呼蘭	4/16-20
牡丹江省	娘々廟	牡丹江	4/18
三江省	娘々廟	佳木斯	4/8
黒河省	東獄廟	老爺廟	4/15
北安省	娘々廟	綏化	4/16-20
興安南省	娘々廟	通遼	4/18
龍江省	娘々廟	洮南	4/17-19
	天齊廟	齊齊哈爾	3/28

(出所) 奥村 (1940, 188-192).

(注) 廟会月日未詳のものは収録せず。

(おそらくは多数) 開かれていたことを示す。しかも県城が直接支配している重要な廟のみならず、県城以外の廟もまた同じ日程を採用している。

1929年の安図県志には「県城の北門外に娘娘廟があり、この日は参詣する老若男女が二千人あまりに達する。各鎮郷にもこの廟があり、同じ日に廟会を開いている」(県城北門外有娘娘廟、是日赴会焚香男女老幼可達二千余人、鎮郷各處有是廟者、亦于此日為会期)とある。県城付近の恐らくは衙門と関係する娘娘廟が最大であり、そこに「二千余人」が集まり、それ以外の「鎮郷」の廟でも同日に娘娘廟会が開かれる。同様に1930年の桓仁県志には「[この日に] 県城の関帝廟と郷村の娘娘廟の廟会がある」(県城関帝廟、郷村娘娘廟香火会期)とあり、1937年の同県の県志には「[この日に] 多くの善男善女が近くの娘娘廟に参詣し礼拝する」(紅男緑女多赴就近之娘娘廟焚香祝禱)とある。この県では県城にある関帝廟のなかに娘娘も祀られているようであり、ここで大きな廟会があり、さらに各地の「郷村」にある廟でも同日に一斉に娘娘廟会が開かれる。1926年の新民県志にも「[この日に] 県城の関帝廟と鎮郷の娘娘廟の廟会がある」(県城関帝廟、鎮郷娘娘廟香火会期)という記述がある。遼中県志(1930年)では「町でも農村でも廟のあるところで[この日に] 廟会を開かないところはない」(凡城郷有廟宇處無不有会)、錦県(1920年)では「城内外娘娘廟会」、安東県(1931年)では「男女が元高山の娘娘に[この日に] お参りし・・・村々の寺廟にもお礼参りに行く婦女も多い」(男女至元宝山碧霞皆焚香・・・而郷間各寺廟、婦女還願者亦多)となっており、これらの県も同じ状況であることを

示唆する。

2. 市場の機能

満洲の廟会でも華北の廟会と同様の市が立つ場合がある。第Ⅲ節で見るように「満洲最大」[内田 1970, 374]と言われた大石橋迷鎮山の娘娘廟会には大規模な市場があった。各地の県志でも、以下に引用するように、廟会の市の賑いを伝える文章が散見される[丁・趙 1989, 193, 95, 206-207]。

錦県県志(1920年):「城内外娘娘廟会」において「百貨雜陳」と言われるような市が立つ。

桓仁県志(1937年):「普通の商人達もまた皆果物・線香などを販売しに来る」(一般商販亦皆前往售得果品, 香紙等物)。

義県志(1931年):1月13~14日という厳冬期に「県城内の大きな寺の廟会では爆竹などを様々に並べ, 食品・玩具を陳列して市を成している。職人も商人も皆休業し, そぞろ歩く人で

道は塞がり, 男女往来し, 参詣は極めて盛んになる」(城内大仏寺廟会, 花炮雜陳, 食品・玩具羅列成市, 工商皆放假, 游人塞途, 男女往来, 極一時香火之盛)。

しかし, 満洲における廟会の市場機能を過大視してはならない。その理由の第1は, 満洲の地方志では「市」に関する記述のなかに廟会への言及が見られない点である。我々が確認した満洲各地の87件の地方誌のうち, 41件に「市」についての記述があるが, 廟会に関連する記述を含むものは一件もない[安富 2002a, 付表参照]。これに対して山東省の地方志では, しばしば「建置」や「集市」といった部分に廟会(山会)の場所や期日が定期市と並んで明記されている。図1は霑化県志(民国24年)の該当箇所であるが, 15カ所の「市集」の期日に続いて, 「会場」という項目で各地の14カ所の「会」の期日が列挙されている。山東では廟会が重要

図1 山東省霑化縣志(民国24年) 卷三の「市集」と「会場」の箇所

王升家會	姜芽店會	張王莊會	富國鎮會	永豐鎮會	畢家廟會	落後寺會	黃昇鎮會	流鐘鎮會	東關會	三官廟會	城隍廟會	藥王廟會	妙相寺會	會場	東張王莊二七	大王莊集四九	姜芽店集二七	新集鎮集四九	利國鎮集三八	泊頭鎮集一六	流鐘鎮集一六	四關集以三八輪轉一六小集在縣署前
三月初三日	二月初五日	二月初五日	十一月初十日	四月初八日	三月二十八日	三月二十八日	五月十七日	四月二十八日	在閩裏五月十八日	在北關十月十八日	在西關七月初七日	在南關四月二十三日	在寺前三月十八日	樓子莊集四九	張王莊集五十	大王莊集三八	豐氏鎮集二七	邢家集五十	富國鎮集五十	黃昇鎮集二七		

(出所) 中国方志叢書 華北地方 山東省 第360号, 台北 成文出版社 1976年。

表3 満洲の主要廟会の規模

廟名	会期	人出
熊岳城岳陽寺	6月27日	「祭典当日前後三日間毎日三千人位宛の人出」
旅順蟠龍山娘娘廟会	4月18日	「参集するもの約二、三万人と称せられ」
閩東州金頂山廟	4月18日	「参集者数千と称せられる」
營口西大廟	4月28-29日	「付近から集るもの数万人と称せられ」
鞍山興盛廟	4月6-10日	「祭典後五日間に約二十万と称せられる」
大石橋娘娘廟	4月16-19日	「参集者十数万と称せられる」
遼陽天齊廟	3月27-29日	「当日参集するもの約二万と称せられ」
安東元寶山娘娘廟	4月18日	「当日は……参集者数万人と称せられ」
安東大孤山娘娘廟	3月23日	「当日参集するもの約五万と称せられる」
鳳凰城娘娘廟	4月18日	「当日参集するもの約八千人と称せられる」
吉林北山娘娘・葉王廟	4月28日	「参詣者十万以上にのぼる」

(出所) 満洲経済事情案内所 (1933, 32).

な市場機能を果たしていたことが確認されており [山根 1995, 77-101 ; 天野 1940 ; 許 1998, 296-302, Yang 1944, 26-27], この県志の記載方法もそれを反映していると思ふべきである。逆に、満洲の県志に同様の記述が全く見られないという事実は、廟会の市場機能がさして重要でないことの反映であろう。

第2の理由は、県内全ての娘娘廟会が同じ日に開かれるという現象である。もし門前の市が重要な商業機能を持つならば、各地で一斉に廟会を開くのは不合理である。少なくとも県内の廟会同士は相互に会期が重ならないようにすべきである。この点は「考察」の節で詳述する。

第3の理由は廟会の参詣者数である。満洲経済事情案内所 (1933, 32) に満洲の著名な廟会19カ所がリストされているが、そのうち9カ所に参詣者数について表3のような記述がある。このリストの数万を越える大規模廟会はいずれも、旅順、營口、大石橋、鞍山、安東、吉林といった鉄道沿線の大都市に位置しており、一般の県城の廟会とは規模が格段に違うものと考えられる。この種の廟会を「鉄道型」と呼ぶこと

ができよう。鉄道型以外では熊岳城岳陽寺が「毎日三千人位」、鳳凰城娘娘廟が「当日参集するもの約八千人」という水準になる。上にリストされているものが、有名な廟会に限られていることを考えれば、普通の県城の廟会の規模はそれ以下であった可能性が高い。第IV節で見られるように、この程度の人出は華北ならば農村部でも見られる水準であり、満洲の鉄道型以外の廟会に、山東の廟会のような複雑で大規模な市場機能を想定することはできない。

以上の理由から、満洲の廟会の市場機能は、一部を除いて、それほど重要ではなかったと推定する。満洲の廟会の市場は華北と異なって、参拝客を相手に飲食物や玩具を販売する「夜店」程度が主流と考えられる。

3. 小括

以上本節の議論により、山東と地理的に近く、またロシア・日本の支配下にあった閩東州を除けば、1920~30年代の時点における満洲の廟会は、次のようないくつかの特徴を持っていたことが示された。まず第1に、どの県でも同じような組合せの廟があり、しかもどの県でも同じ

期日で廟会を一斉に開くこと、第2に、この廟会群の中軸に娘娘廟会があったこと、第3に、廟会の市場機能は鉄道型廟会を除くとそれほど重要ではなかったと推測されること、である。

Ⅲ 農村の廟と廟会

本節では県志に記載されるような比較的大きな廟会の背後にある農村における廟のあり方に注目する。なお、本節の議論は(1)1945年の内田智雄による調査、(2)1930年代後半の農村実態調査のデータに依拠している。

1. 内田智雄の調査

農村の廟をテーマとして行われた調査は、管見の限りでは1945年の内田智雄による遼陽県三塊石屯における2週間の現地調査が唯一である。この調査は昭和20年度の文部省諸学振興委員会の助成による、高坂正顕を主班とした京都大学人文科学研究所の「満洲における道教の現状調査」の予備調査であるが、敗戦によって内田の予備調査のみで中断された。

内田は満洲の調査にはいる以前に華北農村の調査に従事しており、廟について深い知識を有していた。それゆえ内田(1970)に収録されている報告のなかで、華北との違いに注目しつつ、いくつかの重要な指摘を行っている。

まず第1に内田は、「この地方の農村で華北のそれと対照されることの一つは、廟の規模が一般に極めて小さいということである」と指摘する。この地域の屯には大廟と小廟がある。大廟は普通、関帝廟であり、一屯にひとつしかない。遼陽県三塊石屯周辺では大廟で行われる儀礼でさえ、毎月1日と15日、農曆5月13日と6月24日(単刀会と関老爺生日)に「若干の農

民が随便に線香を焚いて詣るとい程度のものであって、華北農村におけるように年に一回ないし二回村廟に集まって、村の年中行事として廟会を行なうというようなことはない」と言う[内田1970, 251]。

また、小廟は文字通り小さな廟宇であり、胡仙・瘟神・土地・山神・九聖・五聖・三聖などであることが多い。これらは土砂を集めて練りかためられた高さ数十センチの極めて小さな犬小屋のような廟宇である。どの屯でもこれら小廟が「あちらの山の上こちらの畑の中、あるいは路傍や後院すなわち住宅の裏庭などにも祀られているのが散見せられる」[内田1970, 325]と言う。

この小廟について内田は特に重要な指摘をしている。それはたとえば同じ小型の胡仙廟が「少ないものでも二個三個、多いものは五、六個と、集団的に並列しているということである」[内田1970, 331-332]。しかも同じ場所につくられた複数の胡仙廟は全てサイズが異なっている。「六個並列しておれば六個とも、その高さ大きさを異にしていることを特色としている」[内田1970, 332]。

内田はこの小廟の所有主をひとつひとつ尋ねて廻り、それが村の寄附による村廟などではなく、病気を避けたり治療したりする目的で個々の家で建てたものであることを見いだした。すなわち満洲の小廟はそれぞれに所有者がある自家用の廟なのである。また、新しく建てる胡仙廟は古いものより大きくつくるという習慣があり、それは古いものより功德効験を多くするためである、と言う。こうして小型の多様な大きさの胡仙廟の集団が散在するという特異な光景が形成された。しかもこれら小廟は概ね荒れ果

ていて、その形状を留めないというようなものも多数見うけられる。内田は「廟といえば、村有の村廟であった華北農村の実情だけからしては、この現象は理解できないものである」としている〔内田 1970, 332-334〕。

なお、1987年に出版された海城県志には文革期の「破四旧」運動による廟宇の破壊について「全县で彫刻彩色のある建築と大小の廟宇の破壊されたもの1万3400棟」（全县有雕梁画棟の建築物和大小廟宇被搗毀13400余座）という記述がある〔海城市地方志編纂委員会 1987, 208；聶 1992, 245〕。1922年におけるこの県の村（後の屯に相当）の数は758であり、単純に割ると1屯あたり17棟を破壊したことになる。各屯の戸数は50戸程度であるから、この数はあまりにも多い。内田の報告した自家用の小廟がこの大宗をなすと考えれば合理的に解釈できるので、このデータは小廟の存在を傍証している。

第3の特徴は、諸神諸仙の合祀である。三聖祠・七聖祠・九聖祠などといった複数の神の合祀を示す名称の廟が多いばかりでなく、単独の神の名称を持つ廟でも複数の神が祀られている。たとえば単家堡子という屯の大廟は「関帝廟」であるがその中には財神・禧神・火神・関帝・龍王・虫王・苗王が並んで祀られている。しかも大廟のみならず、「規模の極めて小さい羣小の廟に、諸神諸仙が数多く合祀」されている。小廟が自家用であることから、様々な願いに応えてくれる神を網羅しておく必要がこの合祀の原因であろう。

この現象についても内田は、「華北農村では嘗て見ないところで、これまた、華北農村と満洲特に南満農村との差異の一つであって、かつまた、華北農村と満洲のそれとの宗教的経済的、

はたまた村落の発生史的な差異を物語るのではないかと思う」と述べている〔内田 1970, 331〕。

2. 農村実態調査報告書

内田（1970）以外に満洲の農村廟について正面から論じた文献は管見の限りでは存在しない。しかし、いわゆる満洲国農村実態調査報告書には、簡単な言及がしばしば見受けられる。付表はその言及を拾ったものである。表4はこのデータを基にして作成した。なお、内田（1970, 294）の指摘するように、行政単位として、満洲の「屯」は華北の「村」に、満洲の「村」は華北の「郷」にほぼ相当する。それゆえ華北の村廟は満洲の屯廟にあたる点に注意されたい。

この付表に収録した実態調査のうち、廟会あるいは「祭」があるかどうかの記述が27件ある。表4では、このうち廟会があると見做し得るものに「○」を付したが、全部で8件にとどまる^(注2)。また「村」という記号が付いているものが3件あるが、これは屯ではなくその上の村で廟会が行われているケースである。これらを除く16件については、廟会が行われていないと考えざるを得ない。

廟会がない屯についての具体的な記述を見ると、「本屯には土廟がある丈で別に祭もない」（奉天省西豊県）、「本屯には廟がないので祭はやらない」（奉天省梨樹県）、「年に一度の祭もなく形ばかりの廟である」（吉林省懷徳県）などのように祭のないことが明言されている。それ以外に、「娘々廟 老爺廟と同廟中に安置され婦女子の信仰する廟にして旧四月十八日及二十八日が祭礼日にしてその日は婦女子は盛装をして祈願に出掛ける。この日は年中最も婦女子の楽しめる日である。・・・一部落挙って楽しむ事は全然ない」（吉林省敦化県）という事例のように、

表4 1930年代後半の満洲農村廟会の様相

村	西豊県	屯に祭なし。県城や屯外の廟会に出かける。村単位の参拝祈願（雨乞，虫害）。
	遼中県	個別にお参りも，屯としてはしない。
	海龍県	外部の廟会（4/18）に出掛ける。
	梨樹県	廟も廟会もない。
	新民県	廟会なし。近屯の廟会（4/18，4/28）に参詣。
○	蓋平県	1/15に廟会。10年に4回くらい芝居を呼ぶ。
	洮南県	参拝するが，廟会はない。
	延吉県	漢族には廟なし。隣屯の土地・山神廟に参拝。
○	榆樹県	6/6に虫王爺廟会，豚を捧げて出金に応じて肉を按分。
	敦化県	廟会なし。4/18に娘娘廟に盛装して参拝。
○	盤石県	豊年を感謝する高脚踊あり。
	盤山県	廟会なし。7/15，8/15，正月に各自参拝。雨乞は盛んに行う。
	黒山県	参拝のみ。
○	寧城県	娘娘廟会（1/15，4/18），虫王（7/5），6月の雨乞に祭を行う。
○	豊寧県	娘娘廟会（4/1）は隣屯より人が集まって盛大だが，1925年以降は芝居・高脚踊もなし。1/15に高脚踊。雨乞をすることもある。
○	鳳城県	青苗会（6/6）で豚を捧げて祈願。青苗会帖を配って，費用を分担。
村	莊河県	1/1，1/15，2/2，7/15，10/1に個別の参拝。3月中旬に西方2～3キロの廟で村単位の雨乞がある。
	惠徳県	廟会なし。屯外5キロの単城子の娘娘廟会（4/18）に屯民が半数以上参拝。
	伊通県	個別に参拝。共同祭祀なし。屯外3キロの大孤山娘娘廟会（4/18）に周辺から3日間で2万人の参拝者。
村	鉄嶺県	屯には祭なし。村であり。関帝（5/13，5/23），虫王（6/13），火神（6/23）。
○	九台県	関帝（4/8，4/18，4/28）に祭。
	朝陽県	旱魃のときに雨乞。
	綏中県	祭祀なし。旱魃の際に1戸ずつ順番に雨乞する。興城県との境界。屯から7～8キロの娘娘廟会（4/18）に行く。薬王廟会（4/28）にも行く。
○	通化県	屯で娘娘廟会（4/18）あり。
	扶餘県	1/1～15に土地廟に参拝。
	長春県	6/6に虫王祭。「祭らしき祭は行はれず」。
	懷徳県	廟がひとつあるが祭はない。

（出所）付表1。

一応は祭の日が決まっているが，屯全体としての行事が行われないという場合もある。

屯内で廟会が行われず，かわりに屯民が多少離れたところにある大型の廟会に農民が参加することを明記している事例は，大型廟会と農村の関係を考える上で重要であるので，以下に該当箇所を引用する。すなわち，

「屯内の小廟の祭りは行はれず，近屯，則ち東高台子（四月十八日），腰高台子（四月二十八

日）の廟会に参詣す」（奉天省新民県）。

「本屯内には廟，祠，祭神等ない。たゞ甲事務所に土地神なるものを祠る極めて小さい祠がある。屯外十支里の単城子に娘々廟があるが旧曆四月十八日には本屯民は半数以上参拝する」（吉林省惠徳県）。

「屯の西南端に小廟があり・・・参拝日には各人線香穀物等を供へるのみで別に共同祭祀は行はれてゐない。屯の西方三軒にある大孤山（高さ約二百米）の山頂には娘々廟があり・・・

近隣一般民家の崇拜する事は非常なもので毎年陰曆四月十八日の祭礼には近郷の者はもとより五里六里の遠き所より参拝するものあり前後三日間を通じて二万余人に達し驚くべき賑ひを呈する」(吉林省伊通県)。

「屯内の祭及娛樂等は屯内に祠が一つあり、祭祠は行はれない、・・・娘娘廟祭は4月18日に行はれるが、之は興城県と綏中県の境界の所、即ち15満里位離れてゐる處に廟がある、此の祭りには本屯の半分位は参詣に行く。其の他4月28日には第2区萬寶山屯の葉王廟にも屯民は出掛ける」(錦州省綏中県)。

この場合、屯の廟会はいずれも不振であり、屯民はそれぞれに大型廟会に吸収されている。伊通県についての記述に見られるように、「近郷の者はもとより五里六里の遠き所より参拝するものあり前後三日間を通じて二万余人」という大型廟会の存在は、広い範囲での一体感の形成に寄与する可能性がある。個々の屯の廟会が不振で、大型の廟会が多数の農民を吸収するという事態は、屯レベルで共同意識を希薄化すると同時に、広域での形成を促進する可能性が高い。

また、付表の記述を見ると、娘娘廟会が農村でも有力であることがわかる。娘娘に言及しているのは、熱河省寧城県・豊寧県、錦州省綏中県、吉林省敦化县・惠徳県・伊通県、通化省通化県の7件あり、そのなかには盛大な廟会が多く含まれている。

これに対し農民の生活に直結する「虫王」あるいは「虫害」に言及したケースは、12件もある(熱河省寧城県・豊寧県、錦州省黒山県、奉天省西豊県・新民県・鉄嶺県、龍江省洮南県、安東

省莊河県、吉林省扶餘県・長春県・榆樹県)。しかし、これらには祭礼に言及しないものも多く、また祭礼を行う場合でも小規模なものであり、娘娘廟会のような広域を対象としたものはない。

さらに、娘々廟会の日程を拾うと、「旧四月十八日及二十八日」(敦化县)、「毎年四月十八日と正月十五日」(寧城県)、「旧四月一日」(豊寧県)、「旧曆四月十八日」(惠徳県)、「四月十八日」(伊通県)、「四月十八日」(綏中県)、「四月十八日」(通化县)となっており、このなかで農曆4月18日に娘々廟会を行っていない例は豊寧県の4月1日だけである。これは農村においても4月18日ルールがかなりの程度貫徹していることを示している。

付表で注意すべきは、市場の開催についての言及が全くない点である。これら調査報告書の「市場関係」の項目にも廟会の市場についての言及は見られない。本項で論じたような全体的状況から考えて、市場が開かれるような廟会が農村部にはほとんどなかったと見做してよからう。華北においては廟会が定期市と並ぶ重要な機能を持っていたのに対し、満洲では県城が市場機能を集中的に掌握していたため、廟会の市場機能は限定されていたものと考えられる。

3. 小括

満洲における農村の廟および廟会の特徴は、以下のようにまとめられる。

- ・屯を基盤とする廟および廟会の存在が希薄である。
- ・自家用の小廟が多数存在する。
- ・娘娘廟会を農曆4月18日に行うという規則が農村でも浸透している。
- ・屯内で廟会を行わず、農民が数キロ離れた大型廟会に出掛けてしまう場合がかなりあ

る。

・廟会の市場機能は弱い。

「考察」の節で確認するように、華北においては、村廟の活動が盛んであり、個人の小廟が見られず、同じ神でも廟会の日程が場所によってまちまちであり、廟会の市場機能が高いことが知られている。満洲の農村廟会の様相は華北のそれと明確な差を示している。

IV 大石橋迷鎮山の娘娘廟会

本節では満洲国時代に満洲最大と称され、資料が比較的豊富に残っている大石橋迷鎮山の娘娘廟会をとり上げ、当時の廟会の様相を考察する。この廟会は満鉄本線から営口への分岐点にあり、交通の要衝にあることで成長した典型的な鉄道型廟会である。

1. 廟の概観

大石橋は元来営口から岫巖を結ぶ道路上の宿駅に過ぎなかったが、中東鉄道南部線が建設され、さらにここから営口へと伸びる営口線が敷設されてから市街が形成されるようになった[山崎 1937, 516]。

大石橋迷鎮山(米眞山)はかつて海城県に属しており、それが蓋平県を経て、最後に営口県に移った。それゆえ『営口県志』(1933年)、『海城県志』(1937年)、『蓋平県志』(1930年)に迷鎮山娘娘廟会についての記述がある(表1備考参照)。これらの記述から、この3県の多数の住民が参拝し、5日間にわたって芝居が奉納され、「子供のない婦人」(婦人無子者)に子供を授けるのがこの廟の最大の機能であることがわかる。また「およそ人民の日用のもつめに応える物で、ならんでいないものはない」(凡人民

日用応需之物、無不備具)と言われるような大きなマーケットがある。

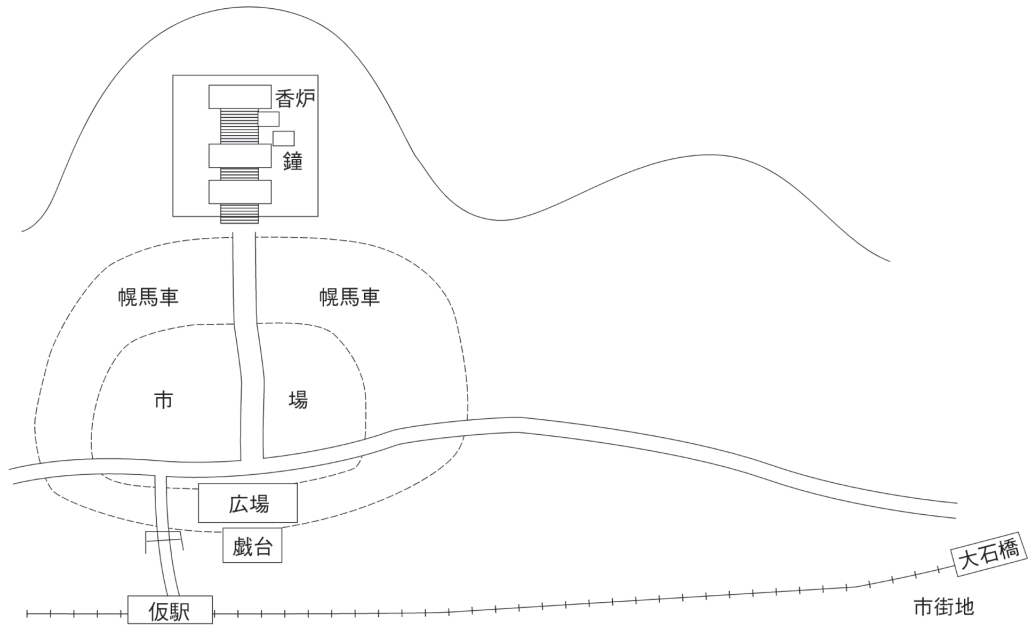
迷鎮山の娘娘廟は図2の如き構造を持っている。まず「仮駅」から出発して参詣路を抜けると「十三登」と呼ばれる十三段の石段坂があり、第一層殿には神哈々二仙があり、次に「二十四登」を上る第二層殿は佛殿であり、中央に如来仏、右に観音菩薩、左に地藏王が祀られている。さらに「十八登」を上ると「三聖宮」であり、ここに娘娘三体が祀られている。この3人の女神は中央が嫫祖元妃一姑娘娘之神位(福寿)、右が苑麻夫人二姑娘娘之神位(治眼)、左が寓氏公主三姑娘娘之神位(授兒)となるように配列されている。

2. 芝居・儀礼・市場

廟の参拝路の入口手前に大きな芝居用の舞台が建てられている。廟会の期間中はここに奉納芝居が掛っている。記録映画で確認すると、芝居の種類は明瞭ではないが古典劇の一種が演じられている。見ている観客は舞台下の広場には1000人程度しか見えないが、その背後の山の麓にいる数千人も舞台を覗いているように見える。とはいえ拡声器を用いていないため、この人々に芝居の音声が届いているかどうかは定かではない。

娘娘廟の最大の効験は子授けにある。女神に仕える女官の抱く男の子の赤ん坊の土で作った像があるが、この性器の部分の削って食べると妊娠するという伝承がある。このため「可哀想に現今では其跡形も無く、却てほじくられて穴があいて尚尻ペタから足の肉迄つみとつて居る」という事態になっていた。「授兒」を願う女性は紅布を褌として胸に十文字に下げてお参りする(十字披紅)。願い通り子供ができた女

図2 1940年頃の大石橋迷鎮山娘娘廟会



(出所) 南満洲鉄道株式会社 (1940) より作成。

性は、山の中腹の露店で土で作った一尺ほどの人形を買い、これを神に供える。映画でも十字披紅の婦人や、妊娠した女性が土人形を抱えている様子が見られる。「治眼」の神に眼病を直してもらった場合には、露店で紙や竹でできた眼鏡を買って供えるという〔満洲経済事情案内所 1933, 11-13〕。

廟会の最も重要な日を「正日」といい、迷鎮山娘娘廟会では4月18日である。「周鉄溝、橋台堡、郷楽荘、鉄嶺屯、百家塞」など周辺の諸村にはこの廟を支持する「会」があり、これらの「会」は廟会正日に各々100人前後の規模の行列を組織し、様々な芸能を披露しながら練り歩く。このなかで特に重要なものが、「五大聖会」と呼ばれる「天吉聖会」(周鉄溝)、「天徳聖会」(鉄嶺屯)、「天泰聖会」(百家塞)、「天仙聖会」(郷楽荘)、「天成聖会」(虎荘屯)である。

たとえば最大の行列をつくる周鉄溝の「天吉聖会」は18の屯で構成され、80人の「会首」がいくつかのグループに分れて各種の演目を取り仕切っている。正日朝8時から「天吉聖会」を先頭にしてパレードを行うことになっていた〔營口市文史資料研究委員会 1990, 93; 1994, 209〕。

日本側資料では正日に「随会」の行列が行われるとの記載がある。「随会」とは「御利益があつて病気の全快した者同志が寄り集つて神仏に御礼に行く群のことで、いろいろの服装をしてゐる」というものである〔満洲経済事情案内所 1933, 11-12〕。随会の行列の呼物は「抬桿兒」である。これは12~16歳くらいの男児3, 4人を扮装させ、長い鉄棒の中間あたりにまず1人の子を右手に茶碗を掲げた状態で括り付け、さらに鉄棒の上部に別の子供を下の子供の持つ茶碗の上に立つような形で括り付ける。これを

数十人で担いで練り歩く。これが普通は2台出るといふ。この行列は、正日の10時頃～午後3時まで行われ、「山には登らないで神殿の正面下の戯台の前で止まる」〔満洲経済事情案内所 1933, 13〕。この廟会では他に、駒獅子、中幡、走馬、早船、高脚会、小車会、などの演芸が行われている〔満洲経済事情案内所 1933, 34〕。確証はないが、「会」と「随会」は恐らく同じものである。

満鉄の記録映画〔南満洲鉄道株式会社 1940〕でもこの行列とそれに伴う行事のうち抬桿兒、高脚会、早船、走馬が見られる。舞台が休んでいる間に舞台前の広場に繋がる東西の道から随会の行列がはいってくる。舞台前の広場に着くと踊りの輪をつくって高脚会、早船、走馬が行われ、その後、もういちど行列をなして山に登っている。抬桿兒は上の記述の通り2台あって、山に登らずに舞台前の道を往復している。

満洲経済事情案内所（1933, 34-35, 40-41）は娘娘廟会の市場について比較的詳しく紹介している。この年の廟会の出店数は「一寸概算しただけでも三百軒を超えていたが、むしろ一枚、布一枚の小露店をも加算すれば実に夥しい数」であるとしている。店の種類は飲食店が最多で、続いて木材、農具、金物、菓子、玩具、装身具、文房具、帽子、靴、帯子、売薬、綿織物、小間物、その他雑貨化粧品などである。マーケットでは「木材、農具、金物と言つたやうなものが却て、大々的に取引されるのである。そして盛んに取引されるのは三日間の祭日より寧ろ最終日頃から後一週間の間である」と言う。つまり、このマーケットは娘娘廟会の参拝客だけに依存しているのではなく、一定の独立した集客力を持っており、「大市」としての機能を果し

ていることがうかがえる。

3. 参拝

大石橋迷鎮山の娘娘廟会の最も印象的な映像は、映画でも写真でも、膨大な数の幌馬車である。多数の農民が幌馬車に乗ってこの廟会に家族総出でやって来て、そこに数日宿泊する。馬車と言っても映画で見る限り、驢馬がほとんどである。この地域は驢馬の方が馬よりも優勢のようである。なお、馬車（大車）の価格は1台80～100圓程度、驢馬が1匹15～30圓程度であり、中農以上の所有物とされる〔安富 2002a；満洲国実業部臨時産業調査局 1937, 122, 附録2；南満洲鉄道株式会社臨時経済調査委員会 1928；永島 1936〕。

これ以外の交通手段は鉄道であるが、満鉄は「参拝客の便利を図り割引往復乗車券を発売し、之が運転は三等片道普通運賃と同額で臨時列車を運行し」という〔満洲経済事情案内所 1933, 2〕。満洲国の鉄道運賃は1940年4月時点で一等1キロ5銭、二等3銭、三等1銭8厘であった。一方で、梨樹県裴家油房屯における1935年の1戸あたり現金年収は平均で86.5圓、1人あたりでは13.4圓であった。規模別では大農で1戸あたり126.5圓、中農で93.3圓、小農で83.2圓となる〔中兼 1981, 101〕。50キロ強離れたところから、農民が鉄道で廟会に行くとなれば、割引乗車券でも1圓弱もかかる。家族全員で参詣すれば、年収の数%が消えることになる。平均的な農民にとって列車に乗って廟会へ行くなどということは難しかったであろう。

徒歩圏内で10万～30万人という参拝者を確保することは無理であるから、相当部分が驢馬車か鉄道で来るということになる。これは娘娘廟会の参拝客の生活水準が相当に高いことを示唆

する。実際、映画を見ると参拝客の身なりの良さに驚かされる。洋服を着こなした都会風の中国人の男女や、農民と覚しき女性でも、チーパオを美しく着飾っている人が多数見られる。参拝者の交通手段や服装から判断して、この廟会の参拝客は列車で来る都市民と、馬車で来る中農以上の農民を主体とするものと考えられる。

彼らにとって娘娘廟会はレジャーの色彩が濃厚であり、地元の農民の行う随会や種々の演芸を「見物」している。映画で見る限り、彼らが娘娘様に祈る姿にそれほどの切迫感はない。この廟会の参拝者は「顧客化」されていると言って良いであろう。「子授け」などの「御利益」に切迫した願望を抱く信者も含まれてはいるものの、それが廟を作り上げ、運営する力に束ねられているとは言い難い。そもそも山麓の雑踏に比して、本殿の階段を登る人の数は遥かに少ない。

内田（1970, 382）は1945年に娘娘廟会に参詣しており、同様の観察をしている。すなわち、

廟の下の山麓一帯には、前記のように雑多無数の露天商人が蟻のように蝟集して、人々もまたその周辺に雑踏していて、山上に登ってくるものの数はきわめてすくないが、これは、ここに蝟集する人々が、廟そのものへの信仰よりも、寧ろ山麓一帯にくりひろげられる年一回の定期市を目的としていることを物語っている。・・・相当数のものが山上に登ることなく、山麓だけでそのまま帰路につくもののあることは否定し得ないようである。

このように当時の満洲において、中心的役割を果たしていた大石橋の迷鎮山娘娘廟会である

が、その隆盛は漢人民衆の自発的活動のみによってもたらされたのではない。そもそも日本側の運行する南満洲鉄道の鉄道駅の付近にあるという立地上の好条件が強く作用している。さらに、臨時列車の運行・仮駅の設置・割引料金の設定といった満鉄による積極的関与のほか、満洲文化協会の宣伝や映画の上映も行われていた。先の満洲経済事情案内所による紹介には「満洲文化協会は、満洲国と相呼応して、得意の宣伝文を刷込んで赤、黄、青の三色に彩られたチラシを各駅は言わずもがな、奥地の部落までべたべた貼られる」〔満洲経済事情案内所 1933, 2〕とあり、宣伝チラシは政府機関各所でも配布されていた。

内田の参詣した1945年時点ではこのような国家的色彩がさらに濃厚になる。参道には「満系の警備団員や少年少女団、それに『満洲帝国道徳会』と白布に黒く染めぬいたたすきがけの少女たちが、『献金献金』と声高く叫んで、参詣者に献金を求めている。・・・献金者には『撃滅英美』と印刷した紙片の佩章を渡してくれる」。芝居の幔幕のひとつに「満洲鉱産株式会社」という染め抜きがあり、「満系を多数擁する同会社の奉納芝居であろう」と内田は推測する。また舞台正面上部の横幕には中央に「協和会」とある。廟宇のなかでも「第一層殿の中央入口には、一個の大きな献金箱がおかれ、それには『献金報国告銃後赤誠』と墨書してあり、三、四名の僧侶が口々に『献金献金』と叫んでいて、まさに献金廟会の感がある」〔内田 1970, 375-379〕。

この点について、営口市の文史資料は次のように述べている。

迷鎮山娘娘廟の祭礼は、清代の統治階級の神仏崇拝に基づいて乾隆年間に始まり、その規模はますます大きくなってゆき、民国期にも絶えることはなかった。特に日本の統治時期に入ると、その活動はピークに達した。日本の統治者は廟会に強い「興味」を示し、廟会の活動に力を入れ、宗教活動を利用して、「日満親善、共栄共存」「一徳一心」といった類のスローガンをみだりに鼓吹した・・・このため、廟会は民間の自発的な祭礼ではあるものの、日本側統治階級の「積極支持」を得るに至り、毎年の会期には「満洲文化協会」「協和会」「弘報処」などの機関が、あちこちに宣伝広告を貼り、参拝客や観光客を誘致しようとした。こうして、毎年の廟会には十数万から、場合によっては20万人が参拝するようになった〔営口市文史資料研究委員会 1990, 91〕。

民国期の廟会は各村会の力で組織されていた。しかし、偽満時期には、一切の準備は依然として各村会の責任によってなされていたが、廟会そのものは政府の直接管轄下にとり行われていた。宗教活動の機会を利用して、いわゆる「大東亜共栄圏」の宣伝を行おうとしていたのである〔営口市文史資料研究委員会 1994, 213〕。

満洲国体制と密接な関係にあったことは当時のこの廟を理解する上で重要である。満鉄によって記録映画が作られたのも、そうした文脈からであり、同じ頃、日本で印刷されたという大石橋娘娘廟の絵葉書が広く流通していたという事実も同廟会のこのような位置づけを示すものである。とはいえ、戦局を反映して上述のよう

な「献金廟会」化があったものの、1945年の段階でも廟会の芝居・随会・市場などは30年代とさほど変化することなく続いていた〔内田 1970, 374-384〕。

4. 破壊と再生

この廟会が停止するのは、廟そのものが国共内戦期の1947年に共産党の手で徹底的に破壊されたからである。破壊の程度は中途半端ではなく、廟の建造物はすべて焼き払われ、一部はダイナマイトで爆破されたという。ただし大戯楼とよばれる芝居用舞台は10年後の1957年に破壊されている〔班 発行年不明, 3〕。

廟の破壊から約45年間、迷鎮山娘娘廟会は活動を停止する。廟会が中断していた間も付近の人々は、迷鎮山に密かに登りつづけ、山の斜面に水を供えたり、祈りを捧げていたという。1980年代に入って宗教活動や民間文化活動に対する規制が緩和されたにもかかわらず、大石橋では廟の復興を図る動きは見られなかった。福建や陝西北部などでは、1980年代に入るなり廟の急速な復興が見られるのに比べると、その動きは鈍かった。

1992年になってようやく同廟復活の動きが見られた。これは「歴史的文化遺産の修復」(回復文化古跡)が政策課題となったことに対応したものであり、大石橋市が各界に呼びかけ、娘娘廟復興に着手した。廟会は現在も郷政府が主催する形をとっており、毎年平均40万円と言われる廟会の収入で、その都度の廟会の支出をまかなうほか、廟の建設費の償還にあてている。行政上は宗教管理弁公室が管理するほか、金橋鎮の文物管理所の管轄下であり、さらにその上の大石橋市文化局が管轄する。

再建された廟は、宗教的にはかつてと同様、

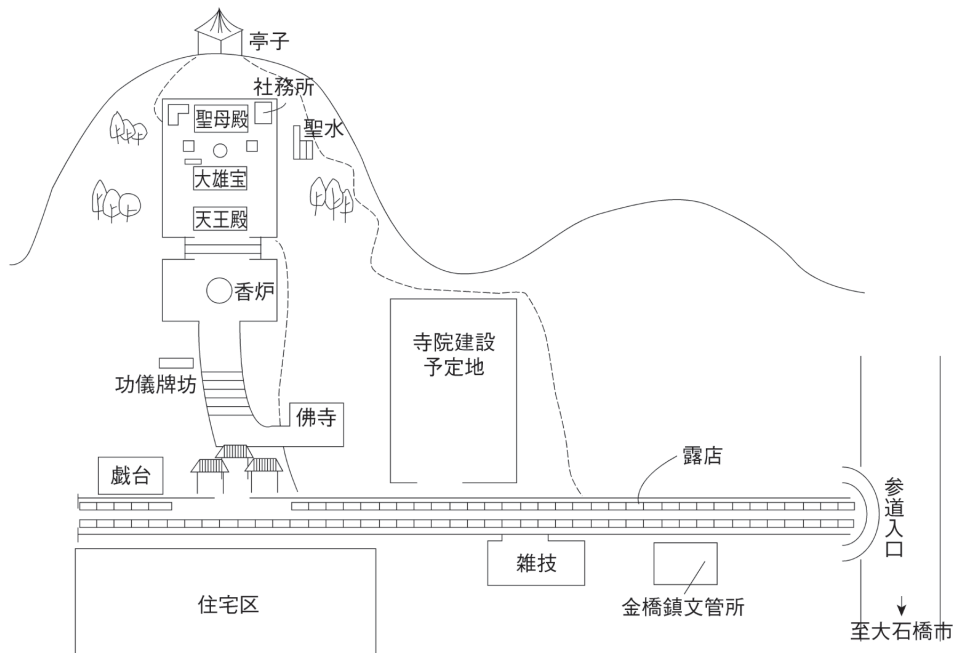
仏教と道教の混合寺廟である。本殿のうち一殿と二殿は仏教神を、三殿には娘娘を中心とする道教神が奉られている(図3参照)。戦前と現在では、娘娘の効験とその並び方が異なっているが、これは元来の順序がわからなくなってしまったからであるらしい。効験については、かつては「福寿、治眼、子授け」の3つがあげられていたが、現在は「福、禄、寿」とされており、子授けの機能は公には付与されていない。もちろん現在も子授けを願う人が多く願を掛けに来ているが、産児制限を行っている現在の政府が、公に子授けを効験として掲げることは憚られるのであろう。「治眼」の機能は目薬が容易に入手し得る現在ではそれほど重要ではなくなったのか、娘娘の傍らに置かれた小さな女神像が担っている。

日常的な宗教活動は仏教協会の派遣している

僧侶と周辺に組織されている居士という仏教徒によって担われている。この居士は現在2000人ほどである。また、かつての「随会」に相当する娘娘廟の固定的な信徒は、現在は毎月1日と15日に小規模なお供えを行っているが、戦前のような廟会正日の組織化された抬桿兒、高脚会、旱船、走馬などの活動は見られない。

現在の廟会の見取り図(図3)を戦前の見取り図(図2)と比較すると、基本的な社殿は復興しているものの、戯台は再建されておらず、かつて鉄道の臨時駅のあったところにつながる参道も、現在は宅地化されて、不通となっている。そのかわり、右手の大石橋市街地方向につながる道の両側に店が多数並んでいる。衣料品、靴、日用品、飲食、装飾品、楽器、薬、占い、絵文字、香などの祭祀用品などで、この他に雑技団と芝居の上演が行われている。

図3 2002年の大石橋迷鎮山娘娘廟会



(出所) 現地調査による。

廟会の運営は迷鎮山娘娘廟会指揮部が担っており、廟会期間中は、参道脇の建物内に本部を設けて管理指導にあたっている。廟会の会長は鎮政府の指名した人物で、会期の前後にわたって廟会全体の運営と統括を任されているほか、金橋鎮の鎮長も会期中は会場内で会務にあたっていた。現在会長を務めている人物は、地元で生まれ育ち、化学工場の工場長を長年つとめていた男性で、必ずしも宗教心が厚い様子ではなく、いわゆる「雇われ会長」的存在であった。したがって日常的には信徒と関わりを持ってはいない。

廟会の正日は戦前と同じ4月18日であるが、期間は戦前が正日前後の5日間であったのに対し、現在では正日とそのあとの2日間となっている。なお、営口周辺には4月18日の迷鎮山娘娘廟会のほかに、4月8日の楞嚴寺、4月28日の西大廟の廟会がそれぞれ復活しており、この一帯の人々の廟会への参拝はこの3カ所に集中している。これら3廟の正日の設定は戦前と全く同じである。

2002年度には地元の小さな評劇団（白話の歌劇）が招聘されていたが、数百人程度の観衆が周りを取り囲んで観ている程度であった。市場は賑わっているが物資の流通拠点としての機能はなく、賑わいに乗じてみやげものや日用品を販売する店と、飲食店がほとんどである。また、廟会終了後1週間にわたって市が開かれていた戦前と異なり、最終日の午後には大半が店じまいする。

参拝客は、圧倒的に多いのが地元大石橋市ないし近隣の蓋州市、営口市の各地から来る人々である。まれに哈爾濱など遠方から友人と車に相乗りをして来た、という人々がいる。廟会復

活後もっとも多いときで30万人の集客があった、と地元の関係者は話しているが、現在の廟会を見る限り1日の参詣者数は数万人にとどまっている。また、戦前と同様に人出の割に山に登る人は少ない。特に境内は、入場料10元が徴収されるために、閑散としている。

5. 小括

「満洲最大」と呼ばれた大石橋迷鎮山娘娘廟会の満洲国時代の有様は以下のように纏められる。

- ・参拝者のほとんどが都市民と裕福な農民である。
- ・彼らは鉄道と馬車を利用して集まってくる。
- ・人々の信仰と廟の運営との分離が見られ、参拝者の圧倒的多数は、顧客化された見物客である。
- ・大規模な卸売機能を持つ市場が廟会から一定の独立性を持って存在している。
- ・満洲国の諸機関との密接な関係の下で運営されている。

迷鎮山の娘娘廟会は、1947年に廟そのものを破壊され活動を停止した。その後も迷鎮山に対する個人的な信仰は継続したものの、再建の動きに纏められることはなかった。1992年に地方政府主導という形態で再建され、その後も政府主導で運営されている。

V 考察

1. 満洲の廟会の概観

前節までの議論を総合すると、満洲の廟と廟会は、(1) 鉄道沿線の巨大廟、(2) 県あるいは区(村)を覆う大型廟、(3) 屯の廟、(4) 自家用の小廟、という四層構造を成していたものと

考えられる。華北で主要な役割を果たしていた村(屯)の廟は、上位の大型の廟と下位の自家用小廟に挟まれて、満洲では概して不振であった。

満洲では、廟会の開催日がどこでも一定している。娘娘廟会(4月18日)以外にも、天斉廟会(3月28日)、佛誕生日(4月3日)、薬王廟会(4月28日)、関帝廟会(5月13日)という主要な廟会の会期は、どこでもほぼ同じである。この期日設定の特徴は、上からの統制力が各々の廟会に強く作用していることを示唆する。これは、廟会の持つ市場機能が華北ほど重要ではないこととも関係していると考えられる。

満洲では、大石橋迷鎮山のような鉄道沿線の巨大な廟会が多数の参拝者を集める。これほど巨大なものでもなくとも、各地の農民は数キロから10キロほど離れた大型の娘娘廟会に出掛ける。こういった大型廟会に参拝する農民は、馬車や鉄道に乗って移動できる比較的裕福な層である。

これは屯の廟会から見れば、その主催者となるべき上中層の農民が、大型の廟会に単なる参詣者として吸収されてしまうことを意味する。残った下層民だけでは満足な廟会を開催することは難しく、線香や饅頭を供えるだけの簡単なものを開くか、あるいは開催を諦めざるを得ない。こうして屯の廟は低調たらざるを得ず、農民は自家用の小廟を建てることになる。

満洲の廟会の最大の特徴のひとつは娘娘廟会が最も重要であるという点である。県域においても城隍廟会や関帝廟会を凌いでおり、農村部でもその重要性はかわらない。奥村(1940, 1)の言うように「当日は村から部落へ、部落から農村へ、農村から大都邑へ、満洲国到る処で夫々地方的に大規模に行はれる」という事態が

展開される。このような行事を一斉に行うという経験を繰り返すことは、満洲に住む人々にとってある種の一体感を醸成する契機となったであろう。関帝廟よりも娘娘廟が重要視されるという事態は他地域では報告されておらず、独自の地域的アイデンティティがこれによって形成され、それが張政権の成長に代表される地域主義の基盤となった可能性がある。

2. 華北との差異

第I節で見たように満洲では、各県がほぼ同じ組合せの廟会を持っており、しかもその会期の設定が全満でほぼ同じである、という特徴があった。農村の廟会は佻しいものが多く、廟会のない屯も少なくない。そのかわりに多数の小型の自家用の廟が群生していた。このような廟のあり方は河北や山東と全く異なっている。

まず河北省の例を見てみよう。表5は河北省25県の県域における廟会の会期の分布を示す。ここから明らかな如く、河北省では同じ名称の廟会であっても、県毎に全く独立した期日を持っている。また、すべての県域に城隍廟会があるものの、それ以外の廟会の有無は県によって異なっており、満洲で優勢な娘娘廟会はわずか5県にしか見られない。すなわち、各県域はそれぞれ異なった廟のセットを持っており、相互に会期も独立に決めているのである。

次に表6を見てみよう。この表は山東省の博興県・臨淄県・濟寧県の県内における廟会の期日の分布を示している。最も多い16カ所の廟会の挙がっている博興県の期日を見ると、「1/1→1/15(2カ所)→2/2(3カ所)→2/19→3/1→3/3→3/8→3/15→4/28→8/15→9/9(2カ所)」という会期設定になっている。重複も見られるが、たとえば2月2日の3カ所は太安廟・観音

表5 河北省25件の県城における廟会

廟名	県地名	開廟期(日数)	付記
城隍廟	肅寧城関	3/9(4)	城内西北角 参集者4000人
	良郷城関	3/9(4) ; 9/9 (4日間)	
	霸州城関	3/15(4)	
	定県東旺村	3/15(4)	
	束鹿城関	3/20(4)	
	易県城関	3/28	
	任邱城関	4/1(4) ; 10/28(4)	
	新城城関	4/4(4)	
	定興城関	4/8	
	晋県城関	5/9(4)	
	房山県城関	5/17(4)	城内西北角
	饒陽城関	5/28(4)	
	大城城関	7/15(4) ; 9/15(4)	
	容城城関	9/9(4)	
	安平城関	9/9(4)	
	容城城関	9/9(4)	
	安平城関	9/9(4)	
	深県城関	9/10(4)	
	獻県城関	9/15(5)	
	徐水城関	9/23(4)	
深澤城関	9/25(4)		
雄県城関	10/1(4)		
武強城関	10/2(4)		
文安城関	10/5(4)		
新鎮城関	10/15(4)		
安新城関	10/15(4)		
老爺廟	安新城関	5/13(4)	関帝廟・関岳廟に同じ
	深県城関	5/13(4)	
	肅寧城関	5/13(4) ; 11/24(4)	
	束鹿城関	5/13(6)	
	大城城関	5/15(4)	
火神廟	容城城関	5/15(4)	夏物の取引盛んなり
	新鎮城関	2/15(4)	
	河間城関	3/16(4) ; 9/24(4)	
	深澤城関	4/28(4)	
	定興城関	5/2	
	易県城関	5/5	
	雄県城関	9/1(4)	
葉王廟	房山県城関	4/10(4)	城南東南角 南関外
	饒陽城関	4/18(4)	
	涿県城関	4/27(4) ; 10/10(4)	
	任邱城関	5/28(4)	
	河間城関	8/28(4)	
	肅寧城関	9/7(4)	
娘娘廟	涿県城関	3/28(4)	北関外
	文安城関	4/15(4)	
	大城城関	4/28(4)	
	徐水城関	6/1(4)	
柳爺廟	晋県城関	9/9(8)	
	文安城関	3/15(4)	
虻蛄廟	徐水城関	3/23(4)	
	容城城関	4/18(4)	
観音廟 関岳廟 聖姑廟 孫濱廟 大士廟 大仙寺 天王寺 天齊廟 東亭廟 八郎廟 北齊廟 葉劉廟 呂祖廟 老君廟 老母廟 佛爺廟	新城城関	9/9(4)	羊皮・羊貨の取引盛んなり 南海大士を祀る 城内南角 孫悟空を祀る* 参集者5000人 参集者10000人 参集者4000人 鉄器をつくる舗子が祭る神 南海老母・南海観音を祀る
	定興城関	2/5(4)	
	易県城関	9/19	
	安平城関	1/15(2) ; 6/6(4) ; 9/16(2)	
	易県城関	1/25	
	束鹿城関	12/21(4)	
	深県城関	3/3(3)	
	良郷城関	5/25(4)	
	饒陽城関	3/28(4)	
	定県東亭鎮	1月 ; 9/25(4)	
	大城城関	3/18(4)	
	定県第一区	3/21(4)	
	定県葉劉莊	3/2(4)	
	新城城関	4/15(4)	
	霸州城関	10/5(4)	
	饒陽城関	9/28(4)	
	河間城関	12/24(4)	

(出所) 天野 (1940, 144-148). 原資料は満鉄天津事務所『河北省農業調査報告』
(1) (3)昭和11 (1936) 年10月, 12月および李景漢『定県社会概況調査』
民国22 (1933) 年2月。

(注) *孫悟空は「斉天」であり, 普通は「天齊」=「東岳」。

表6 山東省各県における庙会状況表

県名	地名	廟名	開廟期(日数)	毎日の参集者(人)	集会状況
博興	東鎮閔	天齐廟	1/1(10)	6,000	演戯酬神売買
		閔岳廟	1/15(6)	500	演戯酬神
	南隅鎮	青塚子廟	1/15(6)	50	焼香酬神
		太安廟	2/2(9)	6,000	演戯酬神売買
	陳戸鎮	観音堂	2/2(9)	8,000	演戯酬神売買
		將軍塚子廟	2/2(7)	250	焼香酬神
	胡家合	胡家台廟	2/19(3月初まで)	10,000	演戯酬神売買
	丈佛郷	丈八佛廟	3/1(8)	1,000	演戯酬神売買
	崇徳郷	龍花寺	3/3(8)	10,000	焼香酬神
	興福鎮	土帝廟	3/8(5)	8,000	演戯酬神売買
	木寨郷	南海廟	3/15(6)	6,000	演戯酬神売買
	劉寨郷	観音廟	3/15(6)	1,500	演戯酬神売買
	北隅鎮	薬王廟	4/28(6-8)	10,000	演戯酬神売買
	城関	城隍廟	8/15(6)	5,000	演戯酬神売買
	伊家郷	太安廟	9/9(8)	4,000	演戯酬神売買
王海鎮	菩薩廟	9/9	342		
臨淄	第二区	菩薩廟	3/11(3)	1,000	游芸酬神売買
		城隍廟	5/28(6-7)		游芸酬神売買
	第一区	三元閣	10/15(8)	7,000	游芸酬神売買
		南廟	3/28(7)	6,000	游芸酬神売買
	第三区	斉陵廟	10月	2,000	演劇売買
		孝陵廟	3/11(5)	2,000	演劇売買
	第二区	北羊廟	3/5(6)	2,000	演劇売買
	城関	城隍廟	5/28(7)	12,000	演劇焼香売買
濟寧	王貴屯	寺壩堆廟	2/24(6)		演劇焼香売買
		奶奶廟	3/6(3); 4/6		演劇焼香売買
		火神廟	1/7	数千	演劇酬神
	魯莊	華佗廟	9/9	数千	演劇酬神
		大士廟	2/19	数千	酬神売買
		爺娘廟	3/3; 10/1		酬神売買

(出所) 天野(1940, 144-148). 原資料は山東省立民衆教育館『山東庙会調査』第一集 民国22年8月。

堂・將軍塚子廟と相互に異なった神様を祀っており、効験が相互に違うことを示す。またこの県には太安廟という名称の庙会が陳戸鎮と伊家郷にあるが、会期は前者が2月2日、後者が9月9日と異なっている。また同県の庙会の参詣者数を見ると、多いところでは1万人が3カ所、8000人が2カ所、6000人が3カ所、5000人が1カ所、4000人が1カ所などとなっており、県内に大規模な庙会がいくつもあることがわかる。

個々の庙会をつくりあげる人的ネットワーク

は、必ずしも村落などの特定のサイズや空間的社会的集団を背景にしているわけではないが、華北の場合それらが重層的、しかも自律的に廟を設立・運営していることが、上記の開催日程からうかがえる。庙会どうしが自律的、競合的に存在している場合、各々の庙会が参拝者をしてできるだけ増やそうと、日程設定を上のようにずらすのは合理的である。

陝西省北部における現在の庙会の開催日程は、付近の廟と重ならないように設定される傾向が

あり、また会期のずれを利用して劇団の招聘などにおいて、周辺の廟会と共同して劇団を招聘するといった協力関係を持つ廟会も見られた。このように、廟会の開催日という情報は、単なる付帯情報ではなく、背後にある廟会の構成原理や社会関係を示唆する重要なメルクマールとなり得るのである。

期日が相互にずれている場合は、自主的競争的に廟が形成され運営されていることを示唆している。これに対して満洲のように期日が一定になる場合は、何らかの公権力や構成員によって、意図的人為的に廟がつくられ運営されていることを暗示する。

満洲の廟会の期日設定について、開拓の歴史が浅いために自主的な人々の繋がりが希薄であることの反映に過ぎないという解釈があり得るかもしれない。しかし同じ開拓地であっても、17～18世紀の台湾では移民当初には出身地別に廟が構成され、それが徐々に在地化して地域単位の廟へと変換していったことが知られている[陳 1987, 112-117]。開拓地ならどこでも官製の廟と廟会が多いというような一般的な説明は難しく、その意味から満洲における廟会の開催日程は、この地域のネットワーク形成の特徴を示すものであると推定することができる。また、満洲の県城経済機構の下では、市場機能は県城に集中しており、廟会が市場機能を担う必要がないという事情も関与していると考えられる。

廟とは直接関係ないが、内田は満洲と華北の違いが明瞭にあらわれる例として、「分家」の表示の違いを指摘している。分家した旨を示すべく家屋に添付されている用紙を「分家単」と言う。内田は満洲の農村でただ一例の分家単を観察しただけであるが、これについて華北のも

のとの以下の違いを指摘している。(1) 満洲のものは華北より甚しく整然たる体裁を持っている。(2) 割り書きのところに華北では「四時和氣」とか「五世其昌」などといった縁起の良いことばを選ぶが、満洲では「分家証明」と書かれている。(3) 満洲では分家単に村公署(華北では郷鎮に相当)に届け出て、その公印を得ているが、華北では村莊の長に分家の立合をしてもらって、分単に署名してもらうことはあるが、公的機関に届けることはない。(4) 立会人の署名とともに正方形に近い形の捺印をしているが、華北では花押が通常である[内田 1970, 289-296]。この例は、公的権力の届く範囲が、華北より満洲においてより低いレベルまで到達していたことを示唆している。

満洲と華北の廟のあり方の差異を、内田は「華北農村と満洲のそれとの宗教的経済的、はたまた村落の発生的な差異を物語るものではないかと思う」としている[内田 1970, 331]。内田は、満洲では胡仙などの小動物を神格化したものへの信仰が見られるが、華北には稀であることを指摘し、その違いの理由を論じた箇所では、満洲のような開拓地の信仰が、厳しい自然条件に培われたところのものであり、早く開拓された華北との差が出たものとしている[内田 1970, 340]。

しかし内田は、「開拓地」であることがどのような経路で、このような差異に帰結したのかを明瞭にはしていない。そもそも自然条件が厳しいと狐や狸を信仰するようになる、というような理由づけは合理的とは考えられない。我々は、次に述べるように、内田の指摘した差異の所以を両地域に形成されていたコミュニケーションのパターンの違い、特に県城経済機構と定

期市網の違い、に求めるべきだと考える。

3. 県城経済機構との関係

安富・福井（2003）の示したように、満洲事変下において県城有力者の団体が独自の通貨（県流通券）を発行して流通を維持し得えたという事実は、県城を中心として県を範囲とした政治的まとまりの存在を示唆している。満洲においてはより上位の権力が脅迫にせよ懐柔にせよ何らかの方法で動員しうる政治的実体が県という比較的大きな単位（人口20万前後）で存在したのである。

張作霖政権は1910年代に短時間で東北の政治権力を統一し、20年代には中原に進出するが、この政治的急成長は上の県城一極集中経済がもたらす政治力の県城への集中と関係していると我々は考える。県城に権力が集中しておれば、そこを抑えるだけで県全体を統御できることになるが、これはコミュニケーションの結節点がより低いレベルの市鎮に分散している場合よりも、遥かに統合しやすい。

張政権の成長した1910～20年代には満洲大豆の輸出が急伸したが、これは上述の県城商人と農民の関係を強化した。商品大豆を生産する農民はこれを県城商人に売却せねばならず、また売却代金によって県城商人から生活物資を購入する必要が生じるからである。この大豆輸出の最終段階を掌握することで、張政権は莫大な外貨資金を獲得した。この資金で近代兵器を輸入して兵力を飛躍的に増強させたが、この兵力増強は関内の軍閥間抗争での力量拡大のみならず、張政権の東北内部の政治的基盤を強固にすることにも貢献したであろう。軍事力拡大による域内基盤強化は、県レベルでの同政権の権威を上昇させ、ひいては県城の農村支配力を高める効

果も持たはずである。この県城の政治力強化により、農民を自家消費作物からリスクの高い大豆商品生産へシフトさせることが容易になる。大豆生産が増加すれば農民と県城商人の結合はさらに強化され・・・、と以下上述のプロセスが繰り返される。

華北の表5および表6と較べると不気味なほどに同期している満洲の廟会の時間的構造（表1, 2）、さらに鉄道主要駅周辺の廟が巨大化して農村の廟の主たる担い手たる上中層の農民を吸収してしまう空間構造、農村において自家用の小廟が発達しているという現象、これらは共に満洲では農村地帯における人的紐帯が脆弱で、逆に公権力の末端たる県城（都市）の機能が卓越していることを示唆する。この結果は、安富（2002a）および安富・福井（2003）で確認した県城一極集中型の政治・経済構造と整合しており、この機構が宗教・文化といった社会的側面にも浸透していたものと考えられる。

（注1）「満洲国」は以下かっこを略して表記する。

（注2）屯で本格的な廟会が開かれていると明確に報告されている寧城県について、同じ報告書が市場機構について次のように述べている。

本県の市場関係につきて特殊な事情は県の平地地帯には調査屯の如き集市の立つ屯が一面に散在して之を中心として周囲大凡二三十支里の小屯が販売、購入のみならず農耕生産生活の全ての取引をなしてゐる事である・・・この寧城平野とも称すべき老哈河の流域には次の二十二の集市の開く屯群がある〔内田 1970, 278-279〕。

このような定期市網が寧城県の「特殊な事情」だと報告されている点が重要である。地理的に華北に近いこの県は廟会でも市場機構でも、特異的な性質を持っている。安富（2002a）の調査ではこの県に定期市が3カ所しか確認されなかったが、その背後にさらに多くの定期市があるものと推定してこの県を「定期市顕

在」に分類した。この資料はこの分類方針の正しかったことを示している。

なお、安富（2002a）は寧城県の市場圏の平均面積と平均人口をそれぞれ2171平方キロと6万7000人と計算し、スキナーの標準（7000人強、50平方キロ）に比して遥かに大きいと主張した。ところが市場数を22とすれば両者はそれぞれ296平方キロと9000人となり、異常値というほどではない。この資料は京奉線沿線地帯の市場構造が、安富（2002a）が想定したよりもさらに華北に近いことを示す。

文献リスト

〈日本語文献〉

- 天野元之助 1940. 「現代支那の市集と廟会」『東亜学』第2号.
- 井岡大輔 1939. 『随録 一簣』私家版 天津（復刻版『意匠資料 満洲歳時考 旧題——一簣——』村田書店 1978年を利用）.
- 石田興平 1964. 『満洲における植民地経済の史的展開』ミネルヴァ書房.
- 石田浩 1986. 「解放前の華北農村の一性格——とくに村落と廟との関連において——」石田浩著『中国農村社会経済構造の研究』晃洋書房.
- 今堀誠二 1953. 『中国の社会構造——アンシャンレジームにおける「共同体」——』有斐閣.
- 上田貴子 2002. 『近代中国東北地域に於ける華人商工業資本の研究』大阪外国語大学大学院博士号請求論文 2002年12月提出.
- 内田智雄 1970. 『中国農村の家族と信仰 改訂版』清水弘文堂書房（旧版：弘文堂 1947年）.
- 奥村義信 1940. 『満洲娘娘考』満洲事情案内所（復刻版：第一書房 1982年）.
- 斯波義信 1961. 「宋代江南の村市と廟市」『東洋学報』第44巻第1, 2号.
- 聶莉莉 1992. 『劉堡——中国東北地方の宗族とその変容——』東京大学出版会.
- 中兼和津次 1981. 『旧満洲農村社会経済構造の分析』アジア政経学会.
- 永島勝介 1936. 『佳木斯を中心とする河下特産事情』満洲中央銀行調査部 調査資料 A 第40号.
- 旗田巍 1986. 「廟の祭祀を中心とする華北村落の会」小林弘二編『旧中国農村再考』アジア経済研究所.
- 平野義太郎 1943. 「北支村落の基礎要素としての宗族及び村廟」『支那農村慣行調査報告書』一 東亜研究所.
- 深尾葉子 1998. 「中国西北部黄土高原における廟会をめぐる社会交換と自立的凝集」『国立民族学博物館研究報告』第23巻第2号：321-357.
- 満洲経済事情案内所 1933. 『満洲国の娘々廟会と其市場研究』満洲経済事情案内所報告6 満洲文化協会.
- 満洲国実業部臨時産業調査局編 1937. 産調資料（45）ノ（10）「農産物販売事情篇」『農村実態調査報告書』第10巻 満洲図書（復刻版：龍溪書舎 1989年）.
- 満洲国国務院総務庁臨時国勢調査事務局 1943. 『康德七年 臨時国勢調査報告 第一巻 全国編』（復刻版：『外地国勢調査報告書 第二輯 満洲国国務院国勢調査報告 第6冊』文生書院 1996年）.
- 満洲帝国大同学院 1938. 『満洲農村の実態——中部満洲の一農村に就いて——』.
- 南満洲鉄道株式会社 1940. 記録映画『娘々廟会』芥川光蔵監督（日本映画新社『満鉄記録映画集 第8巻』1998年所収のものを利用）.
- 南満洲鉄道株式会社臨時経済調査委員会編 1928. 『満蒙に於ける荷馬車』資料第1編.
- 三谷孝 2000. 「村の廟と民間結社」三谷孝他著『村から中国を読む』青木書店.
- 三尾裕子 1997. 「中国福建省閩南地区の王爺信仰の特質——実地調査資料の整理と分析——」『アジア・アフリカ言語文化研究』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）54：151-193.
- 安富歩 2002a. 「定期市と県城経済」『アジア経済』第43巻第10号：2-25.
- 2002b. 「樹状組織と網状組織の運動特性の違いについて——市場構造から見た満洲——」『環』藤原書店 10号：183-188.
- 安富歩・福井千衣 2003. 「満洲の県流通券」『アジア経済』第44巻第1号：38-62.
- 山崎惣興 1937. 『満洲国地名大辞典』満洲国地名大辞典刊行会.
- 山根幸夫 1995. 『明清華北定期市の研究』汲古書院.

〈中国語文献〉

班耀東 発行年不明。『迷鎮山娘娘廟遺聞』大石橋修復迷鎮山文化古跡組委員会編印。

陳其南 1987。『台湾の伝統中国社会』台北 允晨文化実用股分有限公司。

丁世良・趙放編 1989。『中国地方志民俗資料匯編・東北卷』北京 北京図書館出版社。

海城市地方志編纂委員会 1987。『海城県志』。

姜守鵬 1996。『明清北方市場研究』長春 東北師範大学出版社。

李正華 1998。『鄉村集市与近代社会——20世紀前半期華北農村集市研究——』北京 当代中国出版社。

廖迪生 1995。「創建新廟宇——神媒の塑造与信衆の参与——」『寺廟与民間文化研討会論文集』台北 行政院文化建設委員会。

劉志偉 1995。「大族陰影下的民間神祭祀——沙湾の北帝崇拜」『寺廟与民間文化研討会論文集——』台北 行政院文化建設委員会。

鄭振滿 1995。「浦田江口平原の神廟祭典与社区歴史」『寺廟与民間文化研討会論文集』台北 行政院文化建設委員会。

許檀 1998。『明清時期山東商品經濟的發展』北京 中国社会科学出版社。

陝西人民教育出版社編 1994。『中華廟会事典』陝西人民教育出版社。

營口市文史資料研究委員会 1990。「迷鎮山娘娘廟祭及“五大聖会”」（張永夫）『營口港埠面觀』營口文史資料第7輯。

—— 1994。「娘娘廟会震関東」（趙炳火+両臣口述・班耀東構成）『營口港埠面觀』營口文史資料第10輯。

〈英語文献〉

Dean, Kenneth 1993. *Taoist Ritual and Popular Religion in Southeastern China*. Princeton: Princeton University Press.

Duara, Prasenjit 1988. *Culture, Power, and the State: Rural North China, 1900-1942*. Stanford, California: Stanford University Press.

—— 1995. *Rescuing History from the Nation: Questioning Narratives of Modern China*. Chicago, London: University of Chicago Press.

Jing, Jun 1996. *The Temple of Memories: History, Power, and Morality in a Chinese Village*. Standard University Press.

Skinner, G.W. 1964-65. "Marketing and Social Structure in Rural China (I)-(III)." *Journal of Asian Studies* Vol. XXIV, No.1:3-43, No.2:195-228, No.3:363-399.

Smith, A.H. 1899. *Village Life in China*. New York: Haskell House Publishers Ltd. Reprinted in 1968 (Originally published in 1899) (塩谷安夫・仙波泰雄訳『支那の村落生活』生活社 1941年)。

Yang, Ching-kun 1944. "A North China Local Market Economy: A Summary of a Study of Periodic Markets in Chouping Hsien, Shantung." Issued in Cooperation with the Yenching-Yunnan Station for Sociological Research, National Yunnan University, International Secretariat, Institute of Pacific Relations.

〔付記〕2002年の廟会調査は財団法人日中友好会館の日中平和友好交流計画歴史研究支援事業の資金援助による。同調査には著者のほかに永井リサ氏（九州大学大学院博士課程）が参加した。調査にあたっては松村彩氏（瀋陽日本総領事館大連駐在室）、苗勇氏、候朝華氏、曲世偉氏のお世話になった。また大石橋市文化局、金橋鎮政府文物管理所の御協力を得た。また Dr. David Faure（オックスフォード大学）は娘娘廟会についての貴重な資料を提供して下さった。

（深尾・大阪外国語大学外国語学部助教授／安富・東京大学大学院総合文化研究科助教授、2002年7月24日受領、2003年10月21日レフェリーの審査を経て掲載決定）

付表1 1930年代後半における満洲農村廟会の様相

農村実態調査一般調査報告書 康德3年度

奉天省西豊県：「屯内の祭・娯楽▼本屯には土廟がある丈で別に祭もない。県城や屯外の廟の祭りのあるとき出掛ける位である。土廟の祭は年関、五月節、七月節、八月節等に香を焚き焼残供物等をなし参拝する。其の他の雨乞ひ等の祈願をなす場合は白石村にある廟に参拝祈願をなす。豊年感謝祭や虫害に対する迷信からの祈願も同様である。之れ等の催しは白石村長が主となり行はれ、費用は富農の寄付によるのが例である」(441～442ページ)。

奉天省遼中県：「屯内の祭り、娯楽、宗教▼部落の西はづれに土地廟がある。部落民が七、八〇年前に建立せしものである。毎月一日、十五日には信仰心のある者は線香をもつて参拝する。又正月十五日間は屯民一般が参拝してお祭りする。▼若し建物の修理を行ふ様な場合には部落民の地主階級が費用を負担することになってゐる。建物と言つても土でこしらへたものである。黄心廟、狐仙廟はない。▼……▼作物の豊作を祈り、雨乞をやり、豊年を感謝するも、害虫に対する迷信から無事を祈るために屯民が廟前にお祭りする様なことは本屯にては一度も行はれた事はない。▼従つて地主が振舞酒や馳走する様なことはない」(785～786ページ)。

奉天省海龍県：「祭礼▼平安村の廟にて四月十八日▼太平村▼安楽村の善男善女集まりて焼香す▼之以外に臨時に雨乞豊作等の為に農民相集まりて祈ることあり▼この平安村の廟は光緒二十年▼群光道なる人付近に勧進して金を集め▼之にて廟を建て▼余つた金にて畑を買入れ(五十响程)之を基本財産とし廟の費用はこの基本財団より年々支出す▼農民の娯楽は全くなし」(312ページ)。

奉天省梨樹県：「本屯の祭り、娯楽。▼本屯には廟がないので祭はやらない。端午節、中秋節、年関、正月等には屯民は各自馳走をして食す。廟会なし」(942ページ)。

奉天省新民県：「屯内の祭り、娯楽▼屯内には現在三ヶの小廟あり。その祭神は▼七聖祠(馬王、火神、関羽、虫王、岳王、財神、土地)、五聖祠(関羽、馬王、火神、財神、土地)、土地廟(山神)なり。之等の廟に参詣するのは家族の死亡せるとき、暴風の時、災害のあった時、其他馬の疾病、流行するとき等なり。▼次に毎月一日

と十五日には線香を持ち、参詣するを習慣とし居れり。

▼之等屯内の小廟の祭りは行はれず、近屯、則ち東高台子(四月十八日)、腰高台子(四月二十八日)の廟会に参詣す。▼求雨(雨乞)には腰高台子の廟に参詣す」(495～496ページ)。

奉天省蓋平県：「屯内の祭▼一月十五日に行はる。此の祭には時々芝居をやる事あり(十年間に四回位)▼旱魃の時の雨乞或は豊年の時の祭を時々行ふ。芝居を行ふ時は一畝に付五銭位の寄附を取る。廟の費用としては農民より徴取せぬも事ある時に臨時費として徴収す。代表者は村長とす」(325ページ)。

龍江省洮南県：「屯内の祭、娯楽▼正月の十五日間、端午節、中秋節、各家馳走して遊ぶ。正月の十五日の晩は粟糠、麻子油を黄表紙にて包み、川村の通り、庭、屋敷、墓にて炊く。▼中秋節には庭に机を出し、付に西瓜と月餅を供へ線香を立て、拜む……▼本屯には土地廟一ヶあり、祭祀せる神は次の如し。▼土地之神位 山神之神位 廟王之神位▼牛王之神位 龍王之神位 馬王之神位▼虫王之神位 財神之神位 五道之神位▼と記せる位牌様のもの廟の内に並立し祈りあり。▼○廟に参るのは毎月一十五日に参拝する。……▼屯の人が皆参拝するのは雨乞、元宵節。廟の祭りは、一月十五日 撒路燈▼四月十五日 昔から参拝している。▼八月十五日 中秋節なり。▼屯内の雨乞の場合の要する費用は土地所有面積に割当て、徴収する。▼富農が馳走する則ち高粱・小米の飯と、漬物、味噌の程度」(405ページ)。

吉林省延吉県：「四、祭神▼別に神社、廟堂などはないけれど旧正月に豊作と家内安泰をいのり、収穫も終わった十月頃には其の年の豊作を祝して屯内一同がお祭りをするが、海蘭川に近い上村などは其の川縁で、山手の中間屯などは山地で各々寄り集まつて其の年の無事を祝福し豊作を喜ぶのである。……▼(中略)▼満人の場合も屯内には廟等もない。併し隣屯には土地廟、山神廟があつて正月、五月、八月の節句に御供物を持参して参拝する」(505～506ページ)。

吉林省榆樹県：「四、屯内の祭り、娯楽▼毎年陰暦六月六日に虫王爺廟会と称して屯内にて猪を一頭買ひ、廟に捧げ、後之を殺し其の後再び捧げ虫害なき様祈る之が終つた後出金に応じて肉を按分する又正月十五日夜に龍燈と称して若者が燈を作り各戸を廻り歩く位のものな

り」(456ページ)。

吉林省敦化县：「屯内の祭典、娯楽▼1 祭典▼屯内には老爺廟と娘々廟は同一廟中に安置され山神は東西南北に別々に祠られて居る廟祭としては別に之を行ふ事はない。▼祭神の慣習▼老爺廟毎月一日と十五日に線香を或は供物を持って参詣し正月には一家揃って線香或は供物を持って参拝する慣習とし尚ほ病氣其の他の災害のあった場合には炊香をなし供物を供へて祈祷をする。▼山の神▼専ら森林関係者の信仰する神にして一日十五日に線香及供物を供へて御祈をなし正月には老爺廟と同様森林関係者の家長或は家族の者が焼香をなし供物を供へて御祈祷をすと尚ほ山入には必ず線香を炊き供物を供へて無事安泰を祈願し山還の節は無事帰還を告げ且謝するために御参りをする。▼娘々廟▼老爺廟と同廟中に安置され婦女子の信仰する廟にして旧四月十八日及二十八日が祭礼日にしその日は婦女子は盛装をして祈願に出掛ける。▼この日は年中最も婦女子の楽しまれる日である。▼2 娯楽▼屯内娯楽機関としては何もなく県城に出た折芝居等を見る事を唯一の楽しみとされて居るが一般農民は芝居も見るとは滅多になく県城に出る事自身が唯一の楽しみとされてゐる。▼女子供は県城に出る事等は殆どなく彼等の楽しみとされてゐる事は四月の十八日及二十八日の娘々廟の祭礼に盛装をなして参拝をなす位の事である。▼従って一部落挙って楽しむ事は全然ない」。

吉林省盤石県：「屯内の祭、娯楽▼(イ) 土地廟 山神、土地、五道神を祭る。▼(ロ) 太平歌 (高脚踊) 豊年を感謝する祭。▼(ハ) 雨乞 龍王廟にて行ふ。▼(ニ) 農民の娯楽 県城にて芝居の一つも見物したきも先づ皆無なり。▼(ホ) 慶弔に於ける贈答は食はずとも面子上之を行ふ」(504ページ)。

錦州省盤山県：「4 屯内の祭▼屯内には廟がない為め祭りはないが只一つの土廟に一年に三回、七月十五日、八月十五日、正月、迷信的に参る位である。▼雨乞は屯民の死活問題で死物狂ひで行つてゐるが、此の場合富農が屯民に対し振舞酒や馳走する様なことはない」(307ページ)。

錦州省黒山県：「四 屯内の祭り▼正月三日間は家には年紙を飾り各戸で祝ふ。▼元宵節 一月十五日▼端午節 五月五日▼燈節 七月十五日▼仲秋節 八月十五日▼年関 十二月三十日の夜十二時、財神を迎へる祭りだと

云ひ、供物上げ爆竹をならす。▼虫節祭 六月七日 虫害のないやうと祈る日にて、饅頭を上げて祈る」(446ページ)。

熱河省寧城県：「屯内の祭及娯楽▼本屯に於ける祭の内定期的に行はるゝものは娘々廟の祭事なり。之は毎年四月十八日と正月十五日の二回、正月十五日には屯内若者連中の高脚踊を行ふ。▼此外臨時的の祭事としては豊年祭はある。此は本屯地方に於て卅年間も中止の状態にある。▼雨乞いは本屯に於ては例祭にして毎年旧六月、廟内に安置する龍王を轎に入れてかつぎ出し、隣屯迄行列を行ふ。此の時は廟の前に「驢皮影」と云つて幻燈の一種を行ふ。此は高脚踊と共に本屯に於ける娯楽の唯一のものである。▼尚、農作物の害虫駆除の為、本屯の中心地に至る九神廟の「虫王爺」の祭事は七月十五日(旧)に行はる。此際も「驢皮影」を催す。▼此等祭事に要する費用は耕作地所有面積の大小により割当をなし、尚富者は此等祭事に手伝ふ者に馳走をなす。▼本屯に於ける此等祭事の代表者は「傀玉由」氏なり。▼・・・廟修理等の場合は寄附の形式にて支出する」(347～348ページ)。

熱河省豊寧県：「屯内の祭り娯楽▼旧四月一日は屯内娘々廟の祭典で隣屯より老若男女多数集り中々盛大であるが民国十五年以來屯経済は不況続きで芝居、高脚子を催すことも出来ず以前に比して淋しい。▼正月十五日には高脚踊をやり中々賑ふ。▼又雨乞することもある、又虫害甚しい時は虫王神に供物(猪肉牛肉)を献じて祈願する。▼又凶作の翌年豊作になった時、其の祈りを爲した時期により次の様な供物をなす。▼四月一日 猪生(薬王神) - 猪肉▼七月十五日 河生(河王神) - 羊肉▼六月十三日 龍生(龍王神) - 羊」(64～65ページ)。

安東省鳳城県：「四、屯内の祭り娯楽▼本屯の西寄り巍々たる鳳凰山を南方に眺め冽々たる小清泉の前に控へ、数本の老木に囲まれた古祠がある。▼その前で毎年六月六日に青苗会が開かれる。▼唐牌長は青苗会帖を各戸に配り、当日豚を祠前で屠り海紙等を焚ひて収穫の無事を祈る。此の費用は会帖の配られた農家=主として耕作者=が分担する。▼調査年度に於ては故障があつて行はれなかつた」(410ページ)。

安東省莊河県：「四、屯内の祭り、娯楽▼本屯の南方二溝里の地点に立ち古した、二基の祠がある。▼何時の頃出来たものか詳かではないが、屯民の談によれば、于家

の先人の建立に係るものらしく、其の後殆んど手入れもしてないらしく、風雨の打ち過ぐる俣に立ち古びている。▼祭神は馬、牛、虫、龍、火の各王、及び天帝、土帝、水神の八体である。この祠について行はれる行事は左の通である。▼一月一日 焼香、供饅頭、▼一月十五日 焼香、供饅頭、送燈、▼二月二日 焼香、供饅頭、▼七月十五日 焼香、供饅頭、▼十月一日 焼香、▼これ等の祭りは屯全体として行ふ訳のものではなく、各人が思ひ思ひにお詣りする丈のものである。外に此の地方では山中に柞樹に混つて、石を畚んだ形許りの祠があるが、蚕場の守り神として時々、饅頭等を供へると云ふ。▼……………▼雨乞は三月中旬本屯の西方数満里の鍾魁廟に於て莊東村の雨乞が行はれる、その時の費用は一戸当一角～二角で耕作者は三を徴取されたと云ふ」(368～369ページ)。

県技師見習生農村実態調査報告書 康德3年度

吉林省惠徳県：「本屯内には廟、祠、祭神等ない。たゞ甲事務所に土地神なるものを祠る極めて小さい祠がある。屯外十支里の単城子に娘々廟があるが旧暦四月十八日には本屯民は半数以上参拝する」(126ページ)。

吉林省伊通県：「宗教▼屯民は皆漢人にして仏教信者のみである。二十四戸の内十九戸は聖宗仏(観音菩薩)を祀り其他張仙(子孫反映の神)を祀るもの数戸あり又各家には仏壇を設けて祖先の霊を祀つて居る。屯の西南端に小廟があり山神、土神、龍王仙、忠王仙を合祀福利五穀豊穡の神として屯民は齋しく崇拝してある。小廟の参拝日は正月十五日間と普通の月は一日、十五日の二回であるが、近来は正月1ヶ月間参拝して後参拝しないもの或は正月も五日間参拝するのみの者などが現れ信仰心が薄らいで来た傾向がある。▼参拝日には各人線香穀物等を供へるのみで別に共同祭祀は行はれてゐない。▼屯の西方三軒にある大孤山(高さ約二百米)の山頂には娘々廟があり関帝娘々を主神とし仏爺龍王財神神農等々を合祀し災厄疾病除けの神、子授けの神、成功財産の神として近隣一般民家の崇拝する事は非常なもので毎年陰曆四月十八日の祭日には近郷の者はもとより五里六里の遠き所より参拝するものあり前後三日間を通じて二万余人に達し驚くべき賑ひを呈する。▼大孤山街の老人田雨中の話に依れば此娘々廟は乾隆帝渡満当時創立され乾隆帝末

改築を行ひ、其後日露戦争の為破壊せられ長く其まゝなりしを民国十五年に至り田雨中、劉庭春、劉福庭等の発起の下に改築寄付金を募集し約二万圓の浄財を得、同年七月着工三ヶ年を費し、民国十八年七月完成を見たものであると云ふ。現在の建物がそれである。▼娘々廟の所有に属する耕作地が二十响あり其小作料を以て僧侶一名を置き又祭典費修繕費等に当てゝる。大孤山街には娘々廟の外関帝廟、馬神廟、財神廟があるが何れも参拝者が次第に減じ僧侶は乞食に近い生活状態をなしてゐる」(186～187ページ)。

奉天省鉄嶺県：「屯内の祭、娯楽▼屯内の祭としては無いが、然し村として夏家樓に有る。▼1 関帝廟 5月13日 …… 供物 豚1頭、村民が祝ひ後に分配す。▼2 関帝誕 5月23日 関帝の誕生日で、豚1頭供へ村民礼拝す。▼3 虫王 6月6日 虫の発生少なく、農作物のよく出来る様虫王を祭る。▼4 龍王廟 6月13日 年内に於て旱魃、水害に罹らぬ様に龍王を祭る。豚等の供物がある。▼5 火神廟 6月23日 火の害のなき様火神を祭る。▼村祭の費用 村長以下集合して、費用は各自公平に割当てる。一同の代表者は村長で有る。▼農民の娯楽 屯内に於ては何も行はれず、高足踊等もなく普通の踊も時にはあるが稀である」(231ページ)。

奉天省法庫県：言及なし。

農村実態調査報告書(県技師見習生) 康德4年度

吉林省九台県：「祭り▼屯内の関帝廟は4月[8日, 18日, 28日](陰曆)にして屯内こぞつてお祭するわけである」(157ページ)。

錦州省朝陽県：「屯内の祭り娯楽▼関帝廟▼旱魃のときに雨乞をなす」(177ページ)。

錦州省綏中県：「屯内の祭及娯楽等は屯内に祠が一つあり、祭祠は行はれない、これには土地廟(七聖祠)を祭つてある、大清光緒5年10月2日に設立せられたるものである、娘娘廟祭は4月18日に行はれるが、之は興城県と綏中県の境界の所、即ち15満里位離れてある處に廟がある、此の祭りには本屯の半分位は参詣に行く。其の他4月28日には第2区萬寶山屯の薬王廟にも屯民は出掛ける、若し旱天の場合には雨乞ひの為、土地祠の前に行つて1戸1人順次に雨乞をする、其の他の行事は無い」(225ページ)。

農村実態調査報告書（県技師見習生） 康德5年度

通化省通化県：「屯内の祭りと娯楽▼屯に於ける祭りは毎年4月18日娘々廟をお祭りする事になつてゐる、娘々廟とは娘々の神に子供なき奥様たちが子供の出来る様お祈りするのであつて此の祭りには屯民全部出て賑合ふと云ふ、其他の祭は本屯になし。娯楽は正月に賭博をやる位のものであると」（254ページ）。

農村実態調査報告書（農事合作社専務董事候補者） 康德5年度

吉林省双陽県：

農村実態調査報告書（吉林省開拓庁農林科） 康德5年度

吉林省扶餘県：「土地廟の祭にお参りするのには正月一日から十五日迄で、其の他は人の死んだ時一日に三回参つて焼香、焼紙をなして泣く、之は死者の靈は廟に居ると云はれて居るからである。▼土地廟には次の神を祭祀してある。▼山神之位、増福財神之位、虫王之位、馬王之位、閔聖帝君之位、龍王之位、火徳眞君之位、牛王之位、苗王之位、五道君之位と記せる位牌様のものを併立し、

壁には龍王之図を中心に各神の形を模した図が貼られて居る。設立は民国三年七月十五日である。▼○農民の娯楽として見るべきものなし。正月が最も楽しきものである」（303～304ページ）。

満洲帝国大同学院（1938, 403）：吉林省長春県：「廟と名づくべき大なるものなく至極さゝやかなる土地廟と山神廟とあり、端午節、中秋節、年閏、正月に於いて是に饅頭程度の供物を供へるのみにて、祭らしき祭は行はれず。六月六日には山神廟に於て虫王祭を行ひ、農作物に害虫の生ぜざる様祈願するも、之も別に祭と言ふ度のものにあらず甚簡單なるものなり」。

満洲文化協会（1934, 126）：吉林省懷徳県：「部落の西はづれに一つの大きな廟がある、九聖寺と言ふ。勿論廟主も居ない、・・・年に一度の祭もなく形ばかりの廟である」。

（注）この表の出所たる満洲農村実態調査報告書の詳細については中兼（1981）の満洲農村実態調査についての解説を参照されたい。